

探検・探査

探検・探査

創刊号
1992年11月

創刊号・92年11月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

2号

2号・94年11月

横浜市立大学 探検・探査の会

特集：12年間の活動総決算

第11号

(2004年11月6日)

H16

探検・探査

3号

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

4号

1993年4月

4号・96年4月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

5号

1994年6月

5号・97年6月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

6号

1995年6月

6号・98年6月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

7号

1999年5月

7号・99年5月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

8号

2000年7月

8号・00年7月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査

9号

2001年8月

9号・01年8月

横浜市立大学 探査会

探検・探査

第10号

2002年11月

10号・03年11月

横浜市立大学 探査会

横浜市立大学 探検・探査の会

横浜市立大学 探検・探査の会 会報11号

一 目次一

探検・探査の会の役割	会長 大野正夫	1
図解・会運営の12年とこれから	川尻哲夫	2
会則改定の提案	河合武臣	5
資料:①04年度総会議事録	佐藤修史	11
②定例会の議題	川尻哲夫	12
③意見	佐藤修史	15
④意見	小森啓志	16
⑤意見	佐々木仁	19
⑥HPのトップページ		23
素晴らしいOB・OGたち(1:折井亮夫氏)	川尻哲夫	24
アマチュア講談師	折井亮夫	26
素晴らしいOB・OGたち(2:松橋隆司氏)	川尻哲夫	29
『科学』に載った35年前のパタゴニア探検記	松橋隆司	32
素晴らしいOB・OGたち(番外編)	川尻哲夫	34
カナディアンロッキーを歩く	河合武臣	35
これからはハワイ島?	宮崎捷二	41
チベットに係わって	高松康夫	43
バニラ栽培熱から日本人ツーリスト御来臨カルトへ	紙村徹	44
日本全国、転々	禪洲茂	51
日本のエース・クライマーとセブンサミットの関係	佐藤修史	53
会計収支報告	佐々木仁	57
会費納入状況	佐々木仁	
納入のお願い	川尻哲夫	
会員名簿		60

【注】現役のツバル調査隊の報告書(簡略版)は、分冊としました。





探検・探査の会の役割

会長 大野 正夫

探検部OB会、探検・探査の会の設立以来、会長の役をしてきましたが、あまり任務を果たさずに歳月が過ぎてしまいました。私はこの春に高知大学を定年退職し、しばらく高知に留まるので会長の任を辞します。学部時代の探検部で行なったことが懐かしく、いくつかの思い出に残る探検をしました。1968年に高知大学に赴任した翌年、大学にメコン水系学術調査会を作り、高知県内で寄付を集めて、地質の先生と二人で、カンボジアのトンレサップ湖の調査をしました。カンボジア陸水研究所の調査船に寝泊まりして、毎晩、岸辺にある高床家屋の区長さんの家でごちそうになりました。南極観測隊に2度も参加したのも、探検部時代の余韻が残っていたからだと思います。探検部で得た精神的なものは、生涯、余韻となっております。探険部OBは、大学の思い出の多くは、皆と語りあった探険部の活動ではないかと思います。探検部で築いた絆は、非常に強いものだと思います。しかし、その連携は、現役の時の繋がりで結ばれて、数珠玉のようであり、それを結びつけるのが、探検・探査の会の役割だと思います。現役部員には、先輩がどんなことしてきたかを知る機会もOB会の会合であろうと思います。

探検・探査の会は、多いに盛りあがった年もあり、活動がにぶつたように思える時もありましたが、そのようなことはあまり問題でなく、存続することに大きな意義があると思います。最近は、ホームページという便利なものがでて、遠方でも、忙しい者でも、寝る前に、ちょっと探検部や探検・探査の会の様子も見ることができます。私には、ホームページを見ている時間が、青春時代を思い出す時間もあります。現役部員は、多いにOBに甘えて、寄付を募ることは良いことだと思います。寄付を集めて、大きな探検を実行することは、人間的にも鍛えられます。“これはよい”と思えば、寄付は出すものです。

私は、退官記念の文で、多くの官費海外調査に加わったが、一番思い出に残る調査は、寄付を集めて二人で行ったカンボジアの探検的調査であったと書きました。官費調査には、なわくわくする高まりがありませんでした。もし、時計の針をもどすことができれば、もう一度探検をしたいと思います。現役探検部員が、わくわくするような探検を企画したら、大いに寄付をし、また、旗振りもしたく思っています。探検・探査の活動にも、これから多いに参加したく思っております。

12年が経ちました。ここまで来れたことを先ずは、良しとしましょう。

05年度から探探会の運営は大きく変わります

確かに、“会運営の議論をすることが活動である”かのようなこの2年でしたが、財政の赤字解消、現役との連携強化、HPの軌道乗せなどは果たせたのだから、決して無駄な議論をしていたわけではありません。その議論の過程から、新たな会の姿が見えてきました。この提案で、探探会を次の世代に引き継ぎます。

転換1

会の目的を探検から親睦に変える

●会の目的の大転換である。12年前、名乗りを上げた16人の幹事、そして会員の中には仕事のかたわら、きっと探検活動もできるであろう、との思いもあったが、現実には果たせなかつた。無論、個人ではその願望を仕事、趣味、登山、旅行等の違った形で具現化している者もいるが、会としての活動には至らなかつた。今後は、会員の高齢化が進み、ますます困難となるだけに、この重い目的を一旦外して、「親睦でよし」とするところから、会の再出発に踏み出したい。

転換2

組織を簡素化、そして機能的に

●会報の創刊号には16人の幹事の写真が掲載されているが、設立半ばから、実務を担う幹事は数人から徐々に2、3人へと減っていった。さらには、ある一人が不可解な会報を発行する行為に及んだが、それを防ぐこともできなかつた。その背景には、偏った実務の重圧があったことは認めざるを得ない。今後の組織は、総会は2年に1回、日常の問題は会長と幹事数人の合議制で進め、HPで会員に逐次報告するなどして、簡素化、そして機能的に運営させる。

転換3

会費は最低限の年千円。広報機能は、紙から電子媒体へ。

●年会費3,000円は、従来の組織運営を踏襲することが前提で算定されたが、2の転換を因れば年1,000円で十分である。会報発行も2年～3年に1回で良い。但し、HPの安定運営と機能の充実が不可欠。また、必ずしもネット環境が全員に整備されてない以上、紙の通信手段も最小限は必要。その広報（通信）の役割は大きいので、3人以上は必要か？

では、どうする？

この臨時総会では、次の議題を話し合い、
次期総会（05年5月予定）で決定する

1. 会則の改訂（河合案）・提案1～5を中心にして
2. 幹事の辞任と次期幹事の選出・大野、河合、川尻、佐々木の辞任表明
3. その他・HPの充実策・長期滞納者への督促・入退会手続き

会則改定の提案

1961年入学 河合武臣

探検・探査会も1992年の発足から12年たち、その間の活動を振り返り、反省にたって、より活動しやすい会へと改善するためいくつかのことを提案したい。みんなで議論をして、よりよい方向へ歩む出発点になれば幸いである。

提案1 会の目的は、「探検の諸活動を行うこと。」が目的として掲げられている。そして、第3条の会の事業では1番目に探検活動の主催及びその援助となっている。探検活動の援助にあたる後援活動はいくつか行われたが、会主催の探検活動はほとんど行われたことがなく、現実問題としてなかなか困難な状況がある。目的が主催なので、逆にその目的に縛られて、もっと自由で容易に実行できそうな諸活動がやりにくいのではないだろうか。会の発展に役立ちそうな誰でも気軽にできる行事などもっと幅広く行っていくのもよいのではないだろうか。

そこで、会の目的を主として会員の親睦交流におき、必要に応じて探検活動の主催及びその後援をする、というように会の目的に新たに会員相互の親睦を入れ、探検活動の主催を従にしたらどうであろうか。

これによって、もっと気楽に会員交流が盛んになり、その中から新しい行動計画も生まれてくることを期待したい。

(目的)

現行会則 第2条 本会は「地球の自然」と「人間の文化」を愛するものが、世代や分野を超えた相互協力を通して未知の領域を求める探検の諸活動を行うことを目的とする。

改定案 第2条 本会は横浜市立大学探査会、探検部のOB会で、主に親睦交流を目的とし必要に応じて、探検活動の主催及びその活動を後援する。

提案2 ① 会の目的を親睦交流に第1義的に置いたので、第3条の事業の項で、4番に位置づけられていた会員相互の交流、親睦を最初に持ってくるようにしたい。
② 会報の発行については、「毎年の発行は大変でこれがあると役員は引き受けられない、会報はなくしてホームページを活用すればよいのではないか」「不定期発行でも良いのではないか」などの意見がある。今すぐホームページのみの運営は無理のようだが、今後ホームページ

を活用していく方向は意見が一致している。そのことをふまえ、会報発行の義務をなくするため会報発行の文字を削除し、ホームページと封書による通信で行うようにしたらどうであろうか。そして冊子を必要とするような報告内容があるときは、活動報告の通信として現在の会報の形式で作成しても良いのではないかと考える。

現行会則 第3条（3）会報の発行及び探検活動報告
改定案 （2）必要に応じて、本会の諸活動の報告をする。

- ③ 事業の中に新たに「事業は主にホームページの活用をして行う」を入れた。

提案3 第6条の運営組織のところで、今まで会則にない事務局担当などで運営してきたので会則ではっきり位置づけたい。事務担当幹事を新たに1名増やす。会長、幹事長、事務担当幹事（事務局長と言う名でもよい）、会計、会計監査の5名で幹事会を運営する。幹事長は会長の補佐をする。
また、会計監査は年度終わりに監査するだけでなく、幹事会（現行 定例会）の一員として参加する。
なお、幹事会（現行定例会）は第7条2で、総会に次ぐ議決機関とされているので奇数人数にした方がいい。ホームページの担当も新たに必要になっているので、こここのところはいろいろ意見のあるところで、よく話し合ってみたい。

提案4 第7条の会議では、「会議は総会と定例会からなる。」とあるが、定例会のメンバーの規定がなく曖昧である。現行では招集が会長もしくは委任を受けた幹事長で、「幹事の過半数の出席で成立する。」となっているので、会長、幹事長、会計、会計監査幹事は、出席しなくてはならないことになる。定例会メンバーの規定など考えるとややこしくなるので、定例会=幹事会にして、定例会を廃止して幹事会にしたい。なお、幹事以外の人にも集まってもらって話したいときは、拡大幹事会というようにして、会を招集した方がわかりやすい。
また、総会の招集は会長または幹事会とし、集団指導的にしたらどうか。

提案5 同じ第7条の会議のところであるが、（1）定期総会は会長の招集によ

り年1回開催する、とある。そんなに必要性があるのだろうか。最低活動報告と会計報告があるが、ホームページや通信で十分ではないだろうか。総会は必要に応じて開いても良いのではないだろうか。

それで、定期総会をやめ、必要に応じて開催するにして、従って臨時総会の規定もなくしたい。

会計は、会費の徴収や支出があるので一応その年度でしめるが、予算、決算は2年間のもので、よいようにしたい。総会が開かれないと、中間報告として幹事会の承認を受け、後の総会で事後承認でもよいようにしたい。

(総会で年度ごとに決議しなくとも、通信で年度の会計を知らせればよいことにしたい)

以上を、規約にすると下記のようになる。下線が現行のものと違うものである。なお、参考資料として現行会則を後に掲げておきたい。

横浜市立大学探検・探査の会 会則（案） 河合

(名称)

第1条 本会の名称は横浜市立大学探検・探査の会とする。

(目的)

第2条 本会は横浜市立大学探査会、探検部のOB会で、主に親睦交流を目的とし
必要に応じて、探検活動の主催及びその活動を後援する。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会員相互の交流、親睦
- (2) 必要に応じて、本会の諸活動の報告をする
- (3) 探検に関する情報交換及び研究活動
- (4) 横浜市立大学探検部への援助
- (5) 探検活動の主催及びその援助
- (6) その他、本会の目的達成に必要な活動
- (7) 上記の事業は主として会のホームページを活用して行う

(会員の構成)

第4条 本会は、本会の趣旨に賛同する横浜市大探検部 OB 及び旧探査会学生部 OB をもって構成する。

(入会)

第5条 本会に入会するものは、申込書を提出し、所定の会費を納入するものとする。

(運営組織)

第6条 本会は運営のため次の5名の幹事で構成される幹事会をおく。

- 1, 幹事は会務一般を行い、総会で選出するものとする。
- 2, 次の役職については幹事の互選により選出するものとする。
 - (1) 会長は1名とし、会を代表するとともに会務を統括する。
 - (2) 幹事長は1名とし、会長を補佐する。
 - (3) 事務担当幹事は1名とし、会務の事務を統括する。
 - (4) 会計幹事は1名とし、会計事務を統括する。
 - (5) 会計監査幹事は1名とし、会計監査を行う。

3, 会長及び幹事の任期は原則として2年とする。ただし再任は妨げない。

(会議)

第7条 会議は総会と幹事会からなる。

- 1, 総会は本会の最高決議機関であり、必要に応じ会長または幹事会が召集する。また、会員の5分の1以上の請求があった場合に開催する。
 - (1) 総会は委任状を含む会員の3分に1以上の出席で成立する。
 - (2) 総会においては、会則の改廃、活動方針、予算、決算、その他の重要事項を決める。
- 2, 幹事会は総会に次ぐ議決機関であり、必要に応じ会長、もしくは会長の委任を受けた幹事長が召集し、幹事の過半数の出席で成立する。
- 3, 会議の議決はすべて出席者の過半数でこれを決める。

(運営費用)

第8条 本会の運営費用は会費、その他の収入を持ってこれにあてるものとし、会費は別途定める金額とする。

(資格喪失)

第9条 会員は次の各項該当するときは、その資格を失う。

- 1 退会の意思表示をしたとき。
- 2 会費を著しく滞納したとき。

(雑則)

- 第10条 1, 会員が本会の名称を用いて探検活動を行うときは、事前に文書をもつて計画案を幹事会に提出し、幹事会の承認を得なければならない。
- 2, 本会会則にない事項は幹事会と総会の議決を経て別に定める。
- 3, 本会の会計年度は毎年4月1日～3月末日とする。

以上

- (2)幹事長は1名とし、事務を統括する。
 - (3)会計幹事は1名とし、会計事務を統括する。
 - (4)会計監査幹事は1名とし、会計監査を行う。
3. 会長及び幹事の任期は原則として2年とする。ただし、再選は妨げない。

(会議)

第7条 会議は総会と定例会からなる。

- 1. 総会は本会の最高議決機関であり、定期総会と臨時総会からなる。
 - (1)定期総会は会長の招集により年1回開催する。
 - (2)臨時総会は幹事長が必要と認めた場合ならびに、会員の5分の1以上の請求があつた場合に開催する。
 - (3)総会は委任状を含む会員の3分の1以上の出席で成立する。
 - (4)総会においては会則の改廃、活動方針、予算、決算、その他の重要事項を議決する。
- 2. 定例会は総会に次ぐ議決機関であり、必要に応じ会長、もしくは会長の委任を受けた幹事長が召集し、幹事の過半数の出席で成立する。
- 3. 会議の議決はすべて出席者の過半数でこれを決める。

(運営費用)

第8条 本会の運営費用は会費、その他の収入をもってこれにあてるものとし、会費は別途定める金額とする。

(資格喪失)

第9条 会員は次の各項該当するときは、その資格を失う。

- 1. 退会の意思表示をしたとき。
- 2. 会費を著しく滞納したとき。

(雑則)

第10条 1. 会員が本会の名称を用いて探検活動を行うときは、事前に文書をもって計画案を定例会に提出し、定例会の承認を得なければならない。

2. 本会会則にない事項は定例会と総会の議決を経て別に定める。

3. 本会の会計年度は毎年4月1日～3月末日とする。

04年度総会議事録：HPに掲載（記録：佐藤修史）



■5・15総会報告

2004/05/17

探検・探査の会の総会が5月15日午後、横浜市大商文棟であり、OB12人、現役6人が出席した。熊沢、大槻、小嶋の各氏をはじめ、なつかしい顔ぶれが目立った。会の運営方針や現役のツバル遠征をめぐって2時間余り意見交換をし、会費の値下げやHPの充実化などを決めた。

事務局の作業量軽減に向けた改善策に議論は集中。紙媒体を廃し、郵送作業をなくす案、会費を事実上のカンパと位置づけて督促しないとする案もあったが、現行の規約を変えない範囲での指針策定に落ちていた。

近い将来、HP主体の運営に移行することを確認したが、「ネット環境にない会員が少なくないのが現状」との見方もあり、今年度は、印刷物の会報を発行するなど、ほぼこれまで通りの活動を踏襲する格好となった。

主な決定事項は、以下の通り。

(1)名簿の再確認

郵送作業で、会員全員の住所、電話番号、メールアドレスを再確認する。会員を継続する意思があるかどうかも問う。

(2)会費長期滞納者の継続意思の確認

5年以上の滞納者を対象に「払えるだけで結構ですから」という柔らかい表現で納入を促す。

(3)入会手続きには意思確認を義務づける

卒業後に自動的に会員となる案も出たが、現役部員から反対意見が相次ぎ、これまで通り意思確認を要することに決定。意思表示をする項目をHPに盛り込む。

(4)会費の値下げ

現行の年3000円を、今年から年1000円に下げる。

(5)HPの充実化

HPのコンテンツの拡充を図る。(1)の郵便物で、将来HP中心の運営に移行することを会員に伝える。

(6)会報の発行

ツバル遠征の報告や、会員の手記を中心とした会報を学祭までに刊行し、郵送する。河合氏を中心に編集作業をする。

(7)05年度以降の運営の具体案を検討

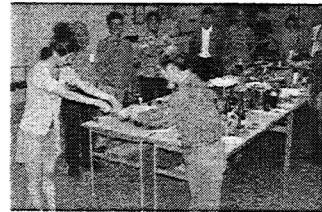
HP主体の会運営について、規約の大幅変更も視野に、具体案を練る。

会運営をめぐる議論のあと、現役部員から今夏のツバル遠征計画の説明があった。部員9人が約2カ月にわたって島々に滞在し、環境、教育、生活などの実態を調査する。総予算は550万円前後。半額余りを大学、OB、企業などの寄付で賄う計画という。

席上、会の総資産49万円のうち20万円の寄付を決めた。また、高松氏は、「天山踏査の会」の余剰金のうち25万円を探検部・山岳部に寄付する決定があつたことを報告した。この資金は、両部が共有できる装備品に使途が限られており、ツバル遠征隊への直接の援助金にはあたらない。予算で想定する寄付が満額集まつた場合、隊員の自己負担金は30万円。現役部員は、OBの個人的な寄付も呼びかけており、この日早速、一部OBからキャッシュが手渡された。

※以上、佐藤が書記を務めたため、僭越ながら要点を記しました。事実誤認等があれば、ご指摘ください。

※写真は、「天山踏査の会」からの寄付金を岡原隊長に手渡す高松氏。



横浜市大探検探査の会：定例会の議題（2004年8月28日）

- 下記の議題を中心にして、「A：定例会で決定すること」、「B：臨時総会で決定すること」、「C：来年度総会、及び以降に検討、実施すること」を明確にして、効率的に進行します。
- 参加者は代案又はご自分の提出議題をお持ち寄り下さい。 <04年8/15：文責・川尻>

1. ホームページの(HP)の運営について

- ・03年から正式に開設されたHPは訪問者、投稿者が最近増えてきたようだが、その改善点もいくつか発生し、より多くの人が利用するHPを目指して具体案を話し合う。

<改善を要する点>

- ①[A]掲示板に投稿、送信すると画面には「ERROR！」が表示されるが、実際に掲示されている⇒混乱を招くので、早急に解消が必要。
- ②[B]報告書の投稿用のパスワードは共通の9981では、それを知らない探探会会員は投稿できない⇒掲示板の暗証キーを使えないのか？また、投稿用のパスワード設定に意味があるのか？
- ③[B]HP会員登録のIDとパスワードと②のパスワードは関連性があるのか？⇒実際に、HP会員には8人しか登録していないので、探探会会員登録とは別物のようになっている。
- ④[B]掲示板・その他は一般人でも閲覧、投稿でき、報告書・その他は探探会会員のみの閲覧・投稿できるコンテンツを明確にすべき⇒HPはあくまで探探会の運営であることの原則に基づく
- ⑤[B]探探会の入退会手続きはHPや個人メールでも出来る仕組みを作る⇒紙での郵送の手続きの省力化を図る。

②～⑤は現在、混乱をきたしている箇所で、探探会の会則に係わる重要な問題。

HPの運用が会則に先行してしまった観がある。

定例会での協議を踏まえて、11月の臨時総会で決定する。

<整理案は当日持参>

- ⑥[A]訪問者のアクセス分析ができないか？⇒訪問日時、どのリンク先から訪問したのか、訪問者のドメイン等の集計が管理者と幹事が閲覧できる。
- ⑦[A]報告書のタグの使い方を分かりやすく説明する⇒
`
</p></blockquote>`
 等の使い方を説明すれば、投稿者の増加と一緒に読みやすい画面につながる。
- ⑧[A]同様に、写真の配置、大きさを自由にできないか？
- ⑨[A]ページの中にフレームを作成して、別のページをすぐに表示させたい⇒現行の会則ページに議事録記録、HPの運営規則を加えて、会運営の基本事項を周知させる場合に、この機能が役に立つ(必要なときにしか読まないが、重要なページ)。
- ⑩[A]⑨とよく似た機能で、ボタンにマウスを置くだけで、クリックしなくても写真や絵が出る⇒Java Scriptの機能で報告書の中の補足事項、地図、グラ

フ、表等がすぐに分かる。

- ⑪ A 表紙の変更（タイトル、ロゴ、コンテンツ、写真等）⇒写真是会員公募の写真を数種類用意して、定期的に差し替える。これも J a v a で自動的にできるはず。
- ⑫ A その他機能の充実（動画・アニメ表示、エクセル等のファイルの容易な掲載可）
- ⑬ A 関連サイトとのリンク、検索エンジン登録等。
- ⑭ B H P管理の担当者（小森啓志氏、中村淳一氏）の権限と担当業務の明確化。
⇒これは、他の幹事業務の明確化の中で議論する。
- ⑮ A 運営費の値上げ

2. 組織の変更、会長・幹事長・幹事の任期、担当業務の変更について

- ① 現行の組織は97年4月に定まったものであるが、01年の“田村問題”の発生以来は役割が曖昧化しており、現幹事は暫定的に任務を継承しているのが実態。
- ② 03年4月からH Pの運営が始まり、会運営の合理化を図るためにH Pへの全面移行案も出たが、現実のH Pにはそれだけの力（全会員のネット環境、情報発信・求心力）は無い。
- ③ 大野正夫会長は05年3月までは、会長職を継続し、以後は辞任の意向を川尻に電話で伝えられた⇒以降も探探会会員は継続されて、後方からご支援をいただくことになった。11月の臨時総会にご出席されて、その表明をされる予定。
また、小森享二幹事長は探探会を本年6月で退会される意志を川尻に電話と個人メールで伝えられた⇒その後、H P上では意志を曖昧にされている。

いざれにしても、この定例会と11月の臨時総会で組織の再編と人事を見直し、05年度から新組織でスタートさせたい。B <見直し案は当日持参>

3. 会報11号の編集とH Pのコンテンツとの整合性について

- ① A 会報11号は11月5日に発行する予定であり、編集内容は河合武臣氏が中心になって決めるが、今後のH Pと会報との内容の区分けを議論したい。
H P…・リアルタイムで簡潔な情報提供と意見交換の場 ・内外情報の受発信に有効
・会員の利用者の少なさが難点（会員はほとんど見ていない？）
・編集の手間は初期のみだが、日常管理が伴う
- 会報…・会員には確実に情報が届くが、鮮度は落ちる ・記念誌的な媒体（H Pでは情報が垂れ流しになりがち） ・内外情報の受発信は不可 ・編集と発送手間が発行の都度伴う
⇒それぞれ長短所をもっており、編集内容を区分することで相互補完を図る。
- ② A 例えば、私がH Pで最近、投稿した「素晴らしいOB・OGたち」は連載させるつもりだが、あくまで会報への呼び水であり、その方々自身の会報への投稿が狙いである。ひいては、会への関心を持ってもらい、相互のコミュニケーションを促進させることが最終目的である。

※すでに、私のHPの掲載文はどこかに埋もれてしまっているので、気づく人は少ない。会報であれば会員全員が気づく（読むか否かは別にして）。ここにもHPの限界がある。

4. 会費滞納者への督促と会員継続の意志確認作業、入退会手続き等

- ① A **長期滞納者（5年以上）**には、10月上旬に文書で督促と会員継続の意志確認を行う。大野会長の名前で発信して、発送実務は川尻が行う。従って、会員消息の最新情報を川尻まで提供してほしい。
⇒この措置は会発足以来、初めて実施する。<文案は当日持参>
- ② B **入退会手続きの簡素化**
・ 入退会基準は会則通りだが、手続きを「HP、メール、本人からの手紙、口頭（面談、電話）で幹事のいずれかに伝える」ことに変更する。
⇒紙の様式提出の廃止。但し、HPやメールでは様式提出とする。
- ③ B、C **入会の勧誘**
・ OBの中には、探探会の存在を知らない方、入会の機会を逃した方がいるようなので、住所が分かり次第、文書を送付して入会を勧める。
- ④ A **最新名簿の作成**
・ メールアドレスを持っていない人、公表したくない人が半数以上いるので、電子媒体での運営面の全面移行は難しい。最新名簿の作成は基本となる。
⇒紙での情報発信という最低限の事務作業は残る。しかし、無駄な作業は極力廃止する。

5. ツバル隊の報告会と臨時総会について

- ① A 11月4日（金）～6日（日）の間に大学祭があるが、その5日（土）をツバル隊の報告会と臨時総会としたい。また、あるOBの講演会も学祭本部の企画行事として現役から案が出されている。これらを同日に円滑に行い、参加者の動員を図るための事前打ち合わせ。
- ② B、C **ツバル隊の展示、出版への協力**

6. 会計状況、事業計画、他

- ① A **佐々木仁氏からの会計報告**
- ② B、C **探探会としての事業構想**
・ 1992年2月発足以来、12年を経過した。会の15周年と探査会（1958年2月発足）の50周年を兼ねた事業を何かできないか？
⇒例えば、2007、8年頃実施に向けて、テーマ、地域を会員公募とする。
- ③ その他

以上



川尻さま、関係の皆様

誠にすみませんが、やはり仕事の都合で定例会には出席できそうにありません。先にだいたい「議題」の中で、気になった部分について、この場で私見を述べさせていただきます。

④B掲示板・その他は一般人でも閲覧、投稿でき、報告書・その他は探探会会員が閲覧・投稿できるようにコンテンツを明確にすべき

これはあまり得策とは思えません。会員外に秘匿すべき内容は個人情報(名簿など)でしょう。会員外のOBがコンテンツに関心をもつかもしれないし、市大関係者以外何らかの情報交換をもたらしてくれる可能性もゼロではありません。

①A長期滞納者(5年以上)には、10月上旬に文書で督促と会員継続の意志を示す。大野会長の名前で発信して、発送実務は川尻が行う。

お手数おかけします。前回の集会で決まったように、やんわりとした文面でおうかがいする格好にしてください。探探会は将来、「会員であること」を厳密に問わない、ゆるやかなネットワークで運営していく可能性を秘めていると思います。その芽を摘むと、縮む前途をたどるのではないかでしょうか。

①A会報11号は11月5日に発行する予定であり、編集内容は河合武臣氏が中心になって決めるが、今後のHPと会報との内容の区分けを議論したい。

恐縮ながら、HPと会報の中身を区分けするという真意がいまひとつ分かりません。HPは自由に何でも書き込めるわけですから、HPとダブらない内容を文集に載せることを対処しようがないと思います。

②03年4月からHPの運営が始まり、会運営の合理化を図るためにHPへの全面案も出たが、現実のHPにはそれだけの力は無い。⇒全会員のネット環境と情報収集力の弱さがまだある。

そもそも会員の多くにHPのアドレスが告知されていないという弱点を抱えていますが、HPの実効性はまだ量れません。今秋の会報の最大の目的はアドレスの紹介でしょう。知したあとも、HPへの書き込み量やアクセス数が増えなかった場合、それはHPの「力の弱さ」というより、探探会への関心の薄さを反映した結果と言えるでしょう。

とりあえず、以上です。

その他のHP改善策については、何が可能で何が困難なのか専門家でないので分ねます。小森・中村のIT首脳陣のやれる範囲で実行していただければよいかと思いつただ、書き込んだ内容がどんどん消されていくのではなく、何らかのかたちで保存されるは必ず確保してほしいと願っています。

定例会の議論をHPにアップしていただけると幸甚です。

資料

1. ホームページの(HP)の運営について

小森啓志（90年入学）

掲示板に投稿、送信すると画面には「ERROR！」が表示されるが、実際には掲示されている⇒混乱を招くので、早急に解消が必要。

●8/25 現在で修正したつもりです。

報告書の投稿用のパスワードは共通の9981では、それを知らない探探会会員は投稿できない⇒掲示板の暗証キーを使えないのか？また、投稿用のパスワード設定に意味があるのか？

●投稿用のパスワードを用意したのは、会費を払っている会員が利用できるようにすること、部外者の書き込みを阻止するためという制限目的でした。今後パスワードを使用するなら掲示板の暗証キーを使えるのが理想です。

HP会員登録のIDとパスワードと②のパスワードは関連性があるのか？⇒実際には、HP会員には8人しか登録していないので、探探会会員登録とは別物のようになっている。

●今のところ関連性はありません。この各個人設定のパスワードが各ページで使えると有効だと思います（中村よろしく）

掲示板・その他は一般人でも閲覧、投稿でき、報告書・その他は探探会会員のみ閲覧・投稿できるようにコンテンツを明確にすべき⇒HPはあくまで探探会の運営であることの原則に基づく

●掲示板は一般の投稿・閲覧ともにフリー 報告書は一般の閲覧フリー、投稿は会員のみがよいと思います。探探会の運営であることは記事の削除権だと思っています。

探探会の入退会手続きはHPや個人メールでも出来る仕組みを作る⇒紙での郵送の手続きの省力化を図る。

●仕組み（フォーム）を作るのは了解です。ただ郵送で入退会手続きが行われていない現状でウェブの仕組みができても利用されないのではないかと思います。入退会のルール作りが先決です。

訪問者のアクセス分析ができないか？⇒訪問日時、どのリンク先から訪問したのか、訪問者のドメイン等の集計が管理者と幹事が閲覧できる。

●現在、http://www.tankentansa.com/_tools/ でアクセス解析できます（要ID、パスワード）

報告書のタグの使い方を分かりやすく説明する⇒

</p></blockquote>等の使い方を説明すれば、投稿者の増加と一層読みやすい画面につながる。

●項目をつけたり、字を大きくしたり、アンダーラインを引いたり、色を変えたりと、レイアウトに関するタグは多いのでどこまで解説してほしいかは人によります。読む意欲を持っている人を対象としている（と思う）のでタグは必要最小限の
くらいでよいと思っています。

同様に、写真の配置、大きさを自由にできないか？

- 自動投稿フォームにしているのでできません。投稿を受けて管理者がレイアウトしなおすか、投稿者がHTMLを覚えれば可能。

ページの中にフレームを作成して、別のページをすぐに表示させたい⇒現行の会則ページに議事録記録、HPの運営規則を加えて、会運営の基本事項を周知させる場合に、この機能が役に立つ（必要なときにしか読まないが、重要なページ）。

- 可能です。

⑨とよく似た機能で、ボタンにマウスを置くだけで、クリックしなくても写真や絵が出る⇒Java Scriptの機能で報告書の中の補足事項、地図、グラフ、表等がすぐに分かる。

- 自由なレイアウトの画面は管理者が製作することになるので、投稿者は管理者にレイアウトを正確に伝えることが不可欠となります。その際、製作に数日を要します。

表紙の変更（タイトル、ロゴ、コンテンツ、写真等）⇒写真是会員公募の写真を数種類用意して、定期的に差し替える。これもJavaで自動的にできるはず。

- 探偵会のテーマカラーや雰囲気は各世代によって大きく変わるとと思うので、表紙はどの世代でも嫌悪されない（であろう）ユニバーサルデザインを意識しています。写真的差し替えは大いに賛成です。

その他機能の充実（動画・アニメ表示、エクセル等のファイルの容易な掲載可）

- 写真だけでなく、エクセルやワードのアップロードはできたらいいと思っています（小森はやり方がわかりません）。見た目が華やかなだけの動画は不要だと思っています（ビデオ映像ファイルのアップロードは賛成）。

関連サイトとのリンク、検索エンジン登録等。

- 検索エンジン登録すると不特定多数が見ることになります。パスワード対策や記事の削除権限をはっきりさせてからのはうがいいでしょう。

HP管理の担当者（小森啓志氏、中村淳一氏）の権限と担当業務の明確化。

- 現在の小森が管理しており、HPに関するすべての権限（更新、コンテンツ、ID、パスワード、削除）は小森が持っています。権限、業務の分散化を大いに望みます。が、複雑になるとすべての進行がストップします（たとえば“記事の削除は役員の過半数の了解が必要”などとしてしまうと機能しないと思われます）

運営費の値上げ

- 現在のサーバーの容量を上げる、もしくは移るときに値上げすればよいと思います。

小森ホームページ案

探探会ホームページコンテンツについて

探探会のホームページは会員間の情報意見交換が主目的だととらえています。

ということで、コンテンツは下記

- 探検探査の会について（概要・会則・入退会フォーム・名簿=会員のみ閲覧可）
- 掲示板（自由な書き込み／2ちゃんねるのようなトピック+レス記事）
- 活動報告書（写真・エクセルデータ添付可／会員のみ書き込み可）
- 書評・時事評（ヤフーオークションのように記事が埋もれにくい形式のもの）
- リンク

検索サイトへの登録と閲覧対象者 レイアウトについて

検索サイトへ登録するということ=不特定多数を対象とする　　登録しない=会員を対象とする
探探会ホームページは会員を対象とするものでよいと考えています。

したがって、

- ・多くの人達の目を引くための動画は不要
- ・アクセス解析は不要（でも解析は見られるので、管理者と幹事は閲覧可とする）

パスワードについて

- ・閲覧に関するパスワード

制限をかけるのは「会員名簿」閲覧と「報告書」「書・時事評」書き込み

HP登録時のIDとパスワードが使えるのが理想

- ・設定に関するパスワード

ホームページ更新に関するパスワード、メール受送信のパスワード、アクセス解析のパスワードは
HP管理者と幹事が把握しておく

資料

市大探検探査の会 定例会（2004年8月28日）川尻案への意見

（2004年8月27日 佐々木仁）

川尻さんから議題及び今後についての意見が出されたので、私見を述べます。

1 ホームページについて

具体的な細かい点については、私はよくわかりませんので、気付いた人が改善点を指摘をし、ホームページ管理担当の中村及び小森が技術的、労力的にできる範囲で、改善していったらよいと思います。

その中で、私からの提案は3点。

① 現在、「報告書」には目次に当たるものがないので、過去に投稿したもののはどん
どん後ろのページに押しやられてしまい、時間が経つと目に触れなくなる。それでは後に見るときにわかりづらいので、形式はこだわりませんが、例えば2ちゃんね
るの掲示板のように、目次がトップかツリー構造で表示されるようにする。

② 現在、名簿は見るだけで管理者以外は手を加えられないようになっているが、こ
れを、管理者以外の人もネット上で自由に情報を書き込めるようにする（そのよう
なソフトはある）。

⇒ これにより、住所や電話番号、メールアドレスが変更になったときも、本人が
更新できることになり、最新の情報が得られやすくなる。（変更の度に管理者に住
所変更等を送るのは、いくらお願いで呼びかけても忘れられがちだし、こうするこ
とによって、管理者が名簿の情報を書き換える手間も省くことができる。）また、
本人がネット環境になくても、会員の中で年賀状等のやり取りをしている人が気付
けば、その人が本人の代わりに更新することができる。

このようにした場合、セキュリティ面等で懸念を持つ方もいるかもしれないが、
そもそもネット上で登録した人しか名簿にアクセスできなければ、心配は要らない
と思う。

③ 会の運営に関するページを別途設ける（詳細は後述）。

2 組織の変更、会長・幹事長・幹事の任期、担当業務の変更について

○ 会長職についてですが、会発足からの経緯として、実務的なことは関東にいる
若手？でやるので、大野さんには象徴的な意味合いも込めて、会長職のお願いを
してきたと認識しています。

大野さんが心から辞めたいと言っているのなら無理にお願いはできませんが、
そうでないのなら引き続きお願いした方がいいというのが私の意見です。理由は、
①探検会の会長といつても、会の統合の象徴という意味合いが強く、企業のよう
に定期的に交替をする必要もない。

②それには、探検部の先輩後輩の中で一番の先輩格に当たる大野さんにお願いし
た方が良い。

③普段会合に頻繁に顔を見せている人が会長になると、探探会は、良く出席している人の内輪だけの会という感じになってしまう気がするためです。

- 会の組織や幹事の担当業務は、本来、今後探探会をどのような会にしていくのかということと切り離しては決められないと思いますが、いずれにしてもあまり官僚的な組織構造にしない方がいいと思います。
- ちなみに、私自身は97年以來会計を担当してきましたので、もう会計をはじめ幹事を務める気はありません。
- なお、名簿の更新、管理は事務局で行うのが適当だと思います。

3 会報について

私自身は、6月の総会を欠席したので、詳細な経緯はわかりませんし、決まつたことをあれこれ言う立場にもないとは思いますが、やはり会報を発行するのですか。

発行するとしたら、今後も定期的（例えば年1回など）に発行していく予定なのでしょうか。昨年度、一昨年度の話だと、会報10号で会の方向性等について書き、それからは発行しない、あるいは不定期発行にするということだと認識していたのですが。

会報を作成すること自体は構いませんが、掲載する内容（原稿）は集まりますか？（10号では集まらなかった。）編集作業、印刷の手配等の手間、発送の人手はどうするのでしょうか。また、これまでの号では、会員の近況報告を載せたり、また原稿募集等を出してその都度会員からの投稿も呼びかけてきましたが、宮崎さんなど一部の人を除き、ほとんど反応がないのが実情です。

私の考えとしては、発行すること自体は（会の予算的にも都合がつくのだし）発行しないよりはいいと思いますが、その事務を負うことになる人の負担と会報を発行する効果を秤にかけると、どうなのかなという気がします。

4 会費滞納者への督促と会員継続の意思確認作業、入退会手続き等

- 5年以上の長期滞納者には会員継続意思確認を行うとのことですですが、私は現時点で行うことには反対です。一昨年に行ったアンケート結果で、あまりに長期滞納している人には意思確認をすべし、という意見が比較的多かったため、6月の総会で、今回行うことになったのだと思いますが、私は反対します。

理由は、

- ① もし、今、やったとすれば、会員数が激減することは目に見えている。
- ② 現会員の中には、会員が減ったとしても、はつきりとさせた方が良いという意見もあるかもしれないが、反面、逆の意見もあり、コンセンサスが取れない。

また、本質から外れるかもしれません、

- ③ 会員が減って、建前だけでなく実質的にも一部のOBの有志の会となった場合、現役を探探会の会員にする、あるいは会と関わらせる理由もなくなるの

ではないか、
という懸念もあります。

①, ②について補足します。

私がここ数年会の実務に携わってきて、何名もの退会をする人から連絡を受けてきましたが、その人達は、残念ながら、総じて、「これからもあくまで探検部のOBであることには変わりないが、探探会は「有志の人が集まる会」であって、何か特別に熱意のある人（例えば探検活動をこれからも行っている人、現役への支援に特別に熱心な人など）が属すべきものであり、自分はもはや会員として参加している必要や意義はない」という考えでした。

これには、辞めたその人自身の心境の変化や取り巻く状況の変化などもあるかと思いますが、それ以上に、これまでの会の活動に魅力を感じなかつたこと、とりわけここ数年の「会費の取り立てや会のことを話し合うこと自体が会の活動であった」という現実に原因があると思います。（だから、今そのまま意思確認を取れば退会者は増えるだろうし、個人的には、その前に会の中身を会員にとって魅力のあるものに充実させることが先決と考える。）

また、今回、意思確認をするのは長期滞納者に対してだけでしょうが、仮にその人達が抜けてしまった場合、実質的な全員参加の前提が崩れ、会費を納入している人の中からも退会者が生じる、あるいは少なくとも会への関心は薄れる人が出てくることでしょう。一度退会した人は、改めて入会するとも考えられませんし、そうすればまさに「OBの一部からなる有志の会」に近づいていきます。

そこで、要は、現在の会員のみんなが、探探会は、組織としてそのような形の会になつてもいいと思うかどうかということです。

私自身は、探探会の今の活動の柱は、「OBの探検活動」や「現役への援助」よりも、「会員相互の親睦」にあると思うので、できるだけ多くの探検部OBをつなぎ止めておいた方がいいという考えです。

探探会は、会費を取る以上、強制参加にはできなかったという経緯もあって、規約上、有志のOBの会ということになっていますが、入っている会員の中には、探探会をOB会（OB全員が基本的には入るべき、例えていえば、市大の同窓生の集まりである「進交会」？のようなもの）という風に思っている人もかなりいるはずです。

○入退会手続きの簡素化について

上記のような考えもあって、ホームページを立ち上げたときに、できるだけ辞めにくくするために、KJ小森と話し合って、退会する場合には紙で送ってもらうことにしました。

また、入会については、ホームページ上からできるはずですが、川尻さんの提案のように口頭で可（しかも窓口が複数の幹事）とすると、今の若いOB達のように、入会しているのかいないのか不明という人が多くなってしまうおそれがあり（しかもそういう話をするとときは酒が入り、お互いに酔っぱらっていることが多い）、会員の把握ができなくなるので、口頭伝聞での入会はやめた方がいいと思います。た

だし、口頭でも、それを聞いた幹事が会費をその場でもらい、本人の代わりに責任を持ってホームページ上でその人の会員登録をするというのであれば、いいでしょう。

5 ツバルの報告会と臨時総会

特になし。ただ、学祭の企画への、参加者の「動員」という言葉の意味合いが、いまいちよくわかりませんが。

6 会計状況、事業計画、他

○会計報告については別紙参照。

○探探会としての事業構想

探探会の事業（プロジェクト）として何を行っていくか、ということよりも、むしろ探探会の現状を見つめつつ、会が当面向かう方向について確認した方がいいと思います。

私自身は、探探会全体として何かをやるというよりも、探探会はOBが集う場として機能を主としてホームページを活用して残し、あとは、その中で呼びかけ人が同志を集めて、〇〇〇〇実行委員会とか、〇〇〇の会とかを立ち上げ、会員は自分の希望する度合いで参加する（例えば積極的に事務を担うとか、資金提供だけはするとか）ようにすればいいと思います。これは何も大きなプロジェクトだけでなく、例えば“昭和40年代の会”とか、そういうのでも同じです。

そもそも、会が全面に出て大きな企画をやることになった場合、事務局や幹事としてそれを引っ張っていけるほどの時間的、労力的な余裕がある人が、それほどいるとも思えません。現実的には、今ままのやり方を、川尻さんが会の職を離れたあとも継続していくのは難しいでしょう。（田村さんでも戻ってこない限りは、ですが。）

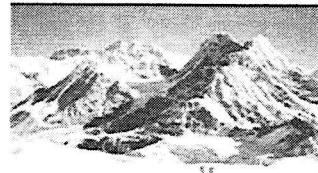
そのような中で、会で大きな企画をやることだけを先に決めて、会全体を巻き込んで進めていくうというのは無理があると思います。

また、会のあり方や事業構想を決めるのに、定足数にも満たない総会等の集まりだけで、準備も不十分なまま、議論の時間も十分に取れないままに決めてしまうのは、どうかと思います。ホームページ上で議論を展開した方がいいのではないかでしょうか。（そのために、HP上に「会の運営に関するページ」を別途設けることも提案します。）

以上

資料

探 検 ・ 探 査



横浜市立大学探検・探査の会

Topics

- 8/1 現役探検部員のツバルプロジェクトが始まります。活動の状況は隊員の清水さんによって「報告書」に投稿される(はず)です。お楽しみに。
- 6/18 探検探査の会の会員登録コーナーができました。
登録すればIDとパスワードで会員情報が見られるようになります。
まだ登録していない方々はフォームに記入してください。
登録はこちらから→[登録](#) (はじめの1回のみ)
会員情報の閲覧はこちら→[会員情報](#) (IDとパスワードが必要)
- 6/07 読売新聞に続いて、現役部員のツバルプロジェクトが朝日新聞にも掲載されました。朝日新聞ネット版はこちらからご覧ください。

Contents

探検・探査の会

探検・探査の会は、横浜市立大学探検部OBと現役部員の会です。事業内容や主な活動など。

掲示板

スレッド形式の掲示板になりました。最近の活動や出来事など、なんでも書き込んでください。

ツバルプロジェクト2004

現役のツバルプロジェクトのページ。スケジュールや隊員紹介、計画書もダウンロードできます。

報告書

活動報告や旅行記など、掲示板には收まらないような内容はこちらへ。写真も掲載できます。現役のツバル報告もアップ予定

現役 探検部

現役探検部のホームページ。まだ工事中の所もありますが、部員や計画書が見られます

旧掲示板

4/20以前の掲示板掲載記事。閲覧用ですでの、あらたな書き込みは“掲示板”にどうぞ。

ホームページのTOPページです。

日常運営は、小森啓志氏（文・90年入学）が勤務先の奄美大島で担い、改善には中村淳一氏（商・97年入学）が加わっています。
会員の方はもちろん、非会員の方も気軽に投稿して下さい。

www.tankentansa.com

素晴らしいOB・OGたち（1）

【折井亮夫氏：四肢は不自由なれど、語りの芸は超一流】

川尻哲夫（70年商学部入学）

探検部OBであり、探検会会員でもある折井亮夫氏（以下、折井さん）は、大阪府立生野高校の生物教師のかたわら、アマチュア講談大会で全国2位の技量をお持ちのこととは知る人ぞ知るところです。

折井さんは1964年に文理学部理科生物科に入学されて、母校の長野県飯田高校の先輩である元朝日新聞の本多勝一記者の影響を受けてか、探査会から移行しつつある探検部に入部された。

大学時代は動物社会学・生態学を専攻。卒業後、大阪市大研究生を経て、高校の生物教師となられました。



第30回講談道場発表会 in ワッハ上方 04.2.28
赤穂義士伝「間十次郎向岸雪の別れ」

さて、この掲示板で皆さんにお伝えしたいこと。

それは、折井さんが今から13年前に、とてつもなく大きな身体上のハンディを背負われながらも、講談という語りの芸術を生きがいにして、その世界で超一流の息に達せられたという事実です。

その病名は背髄損傷。91年に除去手術をされましたが、四肢に麻痺が残り、1年間リハビリ生活を経て、92年から現在の高校に復帰されました。

今では比較的自由が利く右手だけで字を書いたり、キーボードを打ったりしながら、教職の仕事をこなされていますが、ここに至るまでには壮絶な自己との闘いがあったものと推察します。

その困難を乗り越える力になったものは、同じ身体傷害者で今でも現役の営業マンで登山家でもある松田宏也氏との出会いであった、と

のことです。(※詳しくはYAHOOの「松田宏也」で検索して下さい。
その著書『ミニアコンガ奇跡の生還』は、感動を呼び起こす著書です)

“人は身体上のどこかの器官を失っても、他の器官がその代償をして、時にはより優れた能力を發揮する”とはよく言われることです。

が、そこには強靭な意志と明るい心の待ち方が不可欠です。

折井さんの場合も、その境遇にあっても常に何かに生きがいを見出しつつ、残された身体に磨きをかけていく前向きの姿勢を失わなかつたことが、講談という語りの芸術を極めることにつながったのでしょうか。

病気にかかる前から少し始めていた趣味としての講談が、今ではプロと肩を並べる領域まで高められました。

それは、“未知なる身体能力への挑戦”と言えます。

来春には定年を迎えますが、「今後の人生は講談を通して、人に感動と癒しを与えていきたい」と話されていました。

- この文章は、04年7月19日のHP上に「素晴らしいOB・OGたち(1)」と題して私が投稿したものです。5月の総会欠席ハガキに近況報告を数行で述べられたことが、急にお会いしたくなったきっかけでした。もちろん私とは年代的に重ならないし、全く面識もない方です。しかし、折井さんの境遇と講談の腕前を風の便り程度には聞いておりましたので、メールを送って面談を申し出ました。お会いしたところ、実に気さくな方でしたが、身体上の不自由さは、一緒に食事をしたり、歩いたりしたりしても分かり、想像を超えていました。
- 突然、発症されて障害をお持ちになった13年前とは、探探会の設立の頃です。人生の試練と言える時期でも、探探会に入会されて、会員を継続されていたことは、それだけ探検部への思い入れが強く、ご自身の人生に断ち切ることができない何かがあったのかも知れません。

(川尻)



アマチュア講談師

太閤堂海州こと折井亮夫(1964年生物科入学)

きっかけは14年前の学校の忘年会

あと半年、正確には5ヶ月余で定年退職。35年間の教職を退くことになる。大阪の府立高校で生物を教えてきたのだが、人間どこでどう変わるかわからぬもので、目下、私は講談にのめり込んでしまっているのである。きっかけは14年前の教科の忘年会。宴だけなわになったときに、物理科の同僚が講談を始めた。

「そもそも三方ヶ原の戦いは、頃は元亀三年壬申年十月十四日甲陽の太守武田大僧正信玄甲府に於いて七重のならしを整え、その勢三万余騎を従え甲州八華形を雷発なし。遠州周知郡犬井の城主天野宮内左衛門ならびに芦田下野守兩人を案内者として、まず、山縣三郎兵衛正景に五千余人を差添え、遠州飯田多田羅の両城を攻め落しその勢いに乗じて兵を進め徳川家の御味方なる久能三郎衛門宗成の立籠もったる久能の城を攻めかけたるところが、久能三郎衛門宗成は用心嚴重故なかなか落城いたし難く、よって抑えの兵を残し置きそれより在々諸所を乱暴なし民家町家を焼きたて、山名郡、木原、西島、袋井囲、姫小山の麓まで連綿堂々として屯を張る。されば遠三への使者の早馬はあたかも櫛の歯を引く如く、ここにおいて浜松御城中にては神君諸士を集めて軍議評定に及ばれました。この時酒井、石川、大久保ら進み出で……」
とやり始めた。およそ5分。このテンポ、リズムに魅せられて

しまった。



その場でプロに入門決定

「それはなんや?」「講談や、『三方ヶ原の物見』ちゅうねん」「へー、どうしたん?」「いや、講談道場というのがあってな、プロに教えて貰っているんや、ただや」「へー、そんなら俺も入門するわ」

と、その場で入門を決定した。周囲の他の同僚は、酒席のことで真剣には思っていないと、たかを括っていたが、私は真剣そのもの。カルチャーショックそのもの。こんな世界があったのだ。しかも目の前に。しかも、ただ。

早速入門させて貰ったのだが、47才になるまで車の免許を取る以外、習い事、お稽古事をしたことがない。「プロの講談師が直接教えてくれる」、期待と不安が入り交じる。新規入門編がこの「三方ヶ原の物見」である。修羅場読み、あるいは平場読みというのだが、講談独特のリズムとテンポを会得するためのものである。武田信玄が京へ上る途中、遠州浜松の三方ヶ原で徳川家康を

打ち破ったときの話であるが、アマチュアの同僚が、たった5分語つただけで情景が眼前に広がったのだから、入門編とはいえないインパクト十分。師匠にテープに吹き込んで貰いそれを何回も何回も聞いて覚える。ただ覚えるのではなく、リズム、テンポ、感情移入をして、人物を演じるのだから大変だ。



12月入門、翌年3月発表会

ところで講談とはなんぞや？落語、浪曲、講談どれも一人で演じる話芸なのだが、講談は読む、落語は語る、浪曲は謡うという。明治時代には講談は全盛期、大阪では町内に1軒は講釈場があって毎夜講談が読まれていたのだそうだ。テレビ、ラジオのない当時のニュースキャスターだった。ところが、時代の変化、テレビの出現で講談は完全にすたれ、一時全国でプロが十人ほどになってしまった。上方ではたった一人になってしまった。この危機を乗り越えるために、件の、「上方講談道場」が開かれた。アマチュアに講談を身近なものにし、ヒヨットしてプロになる者はいないか、と下心丸見え。それだけに親切丁寧に教えてくれる。教師の身でありながら、「教える術」の旨さに感服した。12月に入門して、明くる年の3月に発表会があった。着物を着て高座に上がる。着物なんか着たことがない、勿論持っていない。先輩に借りて、師匠に着つけをしてもらい初高座。教師として授業では平氣であるのに、高座での15分間の時間がこれほど長く感じたことはなかった。



直後、病魔が體に襲われる

発表会が終わり次のネタ「宇治川の一番渡り」をつけて貰って毎日が楽しかったが、体調異変7月にはどうにもならなくなり入院。手足がしびれ、足をひきずって歩く始末。病名「脊髄症」、精密検査の結果「脊髄腫瘍」と判明。「手術で除去しなければ余命は2年」と診断された。「手術をしても一生寝たきり、あるいは、一生車椅子、燕下障害、咀嚼障害もあり得ます。良性腫瘍か悪性腫瘍かは開けてみなければわかりません」との宣告の後、10時間に及ぶ手術が行われた。1991年9月13日金曜日であった。

「良性腫瘍でしたからあるものをすべて取りました」と主治医の話。ところが、首から下が動かない、必死のリハビリにもかかわらず手足が思うように動かない。とくに左手足は重症、用をなさない。1年間休職しリハビリに勤めたものどうにもならない。脳梗塞で半身麻痺になっている人と見掛けは同じであるが、ちがうのは四肢麻痺、つまり首から下が動かない。しかし、生活がある。なんとか職場復帰をと懸命のリハビリの結果1年間の休職で不自由な身体ながら職場復帰を果した。



苦しい通勤電車を練習場に変えて、生きがいを見つけた

本当は、もう一度講談がしたかったのである。あれから、もう13年。この間、車で事故を繰り返しどうとう運転を放棄。となると通勤が大変。大阪のベッドタウン化した奈良から大阪の都心を経て、郊外の職場まで、乗り換え3回正味45分のすし詰め列車、乗り換え時間30分、最寄り駅から職場へ徒歩20分から30分の通勤は並大抵ではないが、慣れというものは恐ろしいもの。本や新聞など麻痺のある身体では読めない。ましてや、座れずに立って手すりに掴まっているだけだから、この時間が講談のお稽古、「ネタを練る」時間となった。往復の車中でボソボソとネタを練るのが楽しいのである。



講談人生、これからが佳境

10年以上も継続してひとつのことをやっていると「ハク」がついてくる。現在では上方講談道場の学級委員長として世話役をしている。

ヒョンなことから東京講談の神田愛山師匠と知り合いになった。この師匠はアルコール依存症を克服した方で、障害を持ちながら講談をやっている姿を認めてくれ、東京在住のアマチュア講談師との仲をとりもってくれた。そんなわけで年に数回東京へ出没している次第です。東京で講談会をやる際には是非おいでください。

そうそう、昨年亡くなった一龍斎貞丈という講談の大先生は横浜市大1期生だそうです。それから現在、女流講釈師田辺一昌という人がいます。文理学部独文科を昭和61年前後に卒業しているのですが、何かの機会に聞きに行ってみてください。

探検会報にふさわしい内容ではないのですが、そんな探検部OBがいたのです。



第31回発表会

素晴らしいOB・OGたち（2）

【松浦隆司氏：ジャーナリスト第1号を取材する】 川尻哲夫

■新聞社訪問

前衛 10月号

8月の夕暮れ。代々木の或るビルの屋上でその〇Bは、「夕日は神宮外苑に沈み、朝日は新宿御苑から昇る光景が一望できる建物です。せっかく訪ねて来てくれたのだから、この新聞社を案内してあげよう」と暖かな言葉をかけてくれました。

その方は松橋隆司氏。場所は「しんぶん赤旗」の編集局ビル。日本共産党の機関紙を発行する新聞社だけに、一般人の立ち入りはまず不可能と思っていましたが、初めて会った後輩の私にも快く案内をしてくれました。

そして、外信部、政治部、社会部、整理部等の一般の新聞社でおなじみの部署と松橋氏が所属する科学部、さらには印刷・配送部門にいたるまで、実際に丁寧に説明をされて、すれ違う記者の方々には、私を「探検部の後輩」としてまで紹介までしていただきました。お会いするまでの“こわもての先輩”的イメージはいつのまにか消えていました。

朝刊の締め切りを控えた夜7時の編集局。喧騒と活気がみなぎる新聞社特有の雰囲気に加えて、明るい職場であることはとても印象的でした。

■公害調査の先駆け（松尾銅山）

松橋氏は1960年代に生物科と数学科を卒業され、探検部在籍8年の異色OBとして、私たち70年代の現役には知れ渡っておりました。

また、OBの中でのジャーナリスト第1号でもあります。

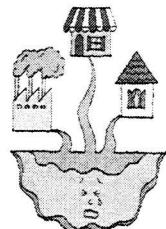
9 -

「生物科3年の時（61年）、大野正夫君や横山宣夫君らと北上川水系の調査とゴムボートによる川下りをしました。調査は川の源流から藻類や水棲昆虫の生息状況を調べるためのものでしたが、途中から松尾銅山の極めて酸性の強い排水が流れ込んでいました。排水を中和処理するために川が赤褐色になり、北上川は本流まで汚されていました。だから、当時は公害という概念が定着していなかった頃で、調査している方もその意識が希薄でした。しかし、企業の方は公害を出している自覚があり、どんな調査をするのかと心配していたふしがあります。公害という概念を知っていたら調査はもっと違った広がりを持ったと思われ、今も強く印象に残る体験でした」

そして、数学科に再入学されて探検部もそのまま在籍されました。数学科の4年生の67年の冬、乗鞍岳の雪上訓練で滑落事故に遭われて、肋骨4本の骨折と左肺を損傷されたことは、市大探検部にとっても初の大事故として、その記録が残っています（『エキスペディションI』に収載）。

■日本ジャーナリスト会議賞受賞

70年、赤旗編集局に入局。政治部、社会部等を経て、81年に初代科学部部長。社会部デスクの時代、敦賀原発事故隠しの実態を明らかにしました。1ヶ月以上の現地住み込みの厳しい取材とのことでしたが、このスクープで松橋氏を含めて3人の赤旗取材版は、81年の日本ジャーナリスト会議の奨励賞を受賞されました。



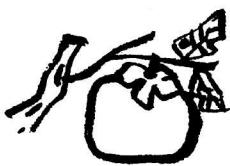
■そして、諫早湾干拓問題を追い続ける

その後、関東・信越総局長、赤旗編集委員等を歴任されて、現在追い続けているテーマは、諫早湾干拓事業と日本の漁業問題。

「諫早湾の事業は公共事業中心の悪しき水産政策の典型で、沿岸漁業の消滅を招くだけでなく、大義名分の農業振興と防災強化にもつながらない。また、干潟は貴重生物の宝庫であり、水質浄化の役目も果たしている。先日、佐賀地裁が工事差し止めを命じて、ようやくその事業の問題点が広く認識されつつあるだけに、漁民の願いである潮受け堤防の開門を早急に果たしたい。

諫早湾に限らず、日本の沿岸漁業が衰退の一途をたどっていく共通の要因は、無駄な公共事業を推進する国の施策にあるので、漁民の見方になって農

水省と戦っているところだ」



■冒険精神は永遠に

「探査会・探検部時代の体験や冒険精神は何物にも換えがたい。自分はOB会の会員になっても、直接、会には係わらなかつたが、現役の活動には関心を抱いていた。今夏のツバルでは、現役諸君が何を見て、どの視点に立つて発表するかを期待している。また、OBの中にも目立たないが、立派な仕事をしている者が数多くいるので、そのようなOBと現役とのパイプ役をOB会が担えば、と思う」

松橋氏は社会に起きた諸問題を自然科学の立場から丹念に取材して、弱者の視点に立って事実を報道する職業を選び、ジャーナリズムの世界に足跡を残しました。

来年春に定年を迎えますが、もし今後、現役との接点を持っていただければ、彼らが“科学の眼を通して事実を追求する記者魂”に直にふれることで、探検活動や進路選択に大きな示唆を与えることでしょう。

●折井さんの訪問記に続いて、04年10月1日のHP上に、「素晴らしいOB・OGたち(2)」と題して投稿しました。折井さんと同様に、総会の欠席ハガキを頂戴して、お会いしたくなった方の一人でした。私からの面談希望のハガキに対して、OKのお電話を頂戴して、赤旗編集局への訪問となりました。

●松橋さんも同様にOB会の創立以来から、会員を継続されておられます。大学の入学年度は大野会長よりも古く、なんと1955年です。探査会の設立にも関わられて、消息の取れる数少ないOBのお一人だけに、会員を継続していただけることは、50周年事業や今後の会の運営にお力を注いでいただけるかも知れません。

●松橋さんから『科学』に掲載された京大探検部OBの手記のコピーをいただきました。同誌は35年前にパタゴニア探検を実現させた部員の詳細な報告書に手を加えずに掲載し、今後十数回も連載するそうです。

次頁は松橋さん自身による紹介文と同誌の第1回分の冒頭部分です。

●この訪問記がいつまで続くかは分かりませんが、会員・非会員に係わらず、できるだけ多くのOBにお会いしたいと考えています。そして、現役との接点を切らさずに、そして私たちOB自身も「老いてもなお、互いに学び、啓発し、親睦を深める」機会を作ればと願っています。

(川尻)

『科学』に載った35年前のパタゴニア探検記

松橋隆司(63年生物卒、67年数学卒)

■岩波書店の月刊誌『科学』で京大探検部OBの安成哲三氏(名大地球水循環研究センター)が、35年前に書いた手記を掲載している。十数回の連載で4月号から始まっている。学生時代の記録をそのまま載せているのがミソで、面白い。参考までに紹介してみよう。

■タイトルは「チリ・パタゴニア1968年-69年 ある学生探検の記録」。筆者は現在研究者。当時は探検部に所属する理学部学生で、パタゴニアの「未開地域」の探検を思い立つ。2年近く費やして68年に夢が実現し、帰国後半年かけて記録を残したものだ。

35年も前の記録を今ごろになって、なぜ？ 筆者は「探検とは科学研究と基本的に同じ営みであり、社会に報告されてこそ意味があるという、私の素朴な気持ち」と「探検へ駆り立てた『未知への憧れ』とは、いったい何であったのか、もう一度検証したいという気持ちからだ」と書いている。

■そして探検は、「帝国主義列強の国々が、自らの植民地やその候補地の自然や人文現象を、支配者の側から調べるという、影の部分も付きまとった行為であったことも否定できない」とする一方、「人類全体にとつても、どこかポジティブで普遍的な価値をもっているはずだ」という心情を、私は今も捨てがたく持っている」と述べている。

■筆者は友人3人とともに2回生のときに山岳部から探検部に移った。探検とは、地球上の「未開なところに乗り込んでいく冒険とロマンに満ちたものだと単純に思っていた」が、その期待は裏切られる。世はまさに海外旅行ブーム。行こうと思えばどこへでも行ける時代になった。探検部では「どこに行くのか？」という問い合わせよりも「行って何をするのか？」という問い合わせが強調されていた。

「そういう雰囲気に反発を感じ」つつも、パタゴニアへの夢を実現していく。その悩みや努力を、資金や物品集めの苦労に共感するであろう。

探検部とは

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学・地球環境学)



イラスト=安成 哲

山登りから探検へ

1966年もおしこまつた12月のある夜、ぼくたち3人(伊藤隆^{*1}、井上民二^{*2}とぼく)は、井上の下宿でこたつに入り、ウイスキーをちびちびやりながら、世界地図を前に話し合っていた。当時、山岳部員だったぼくたちは、1回生として、はじめての雪山でのスキー合宿をまだかにひかえ、何かとおちつかなかつた。が、話はずんだ。

「ビルマ奥地はオモロイやろな」、「いや、やっぱりアマゾンやで」、「カムチャッカか千島やつたら、ソ連とかうまいことしたら、あとは漁船で行けるぞ」などなど、地図帳をひっくりまわしては、たのしんでいた。しかし、3人とも山岳部員のくせ、ふしぎヒマラヤとか、アルプスの話は出なかつた。それには、わけがないでもなかつた。

たしかに、ぼくたちは山登りが好きだつた。しかし、同時に、山登りだけでは何ものたりない、つまらないという気持があつた。とくに、近ごろのように、登山人口が多くなつたために、夏山はおろか、冬山でも、あらゆる尾根、谷、峰々にひとびとがおしかけ、あらゆる岩壁といつ岩壁に、

ハーケンやボルトがうちこまれるとなると、そういう気持はいっそう強くなる。といって、もし、まだ人の登つてない岩壁なんかがあると、とびついていきたいかというと、そうではない。どうも、すこし趣味がちがうようだつた。

ぼくは、すでに中学1年の時から山岳部にはいって、山登りをたのしんでいた。しかし、どういうものか、「ゆめ」というものが、ヒマラヤの処女峰をきわめようとする登山家よりも、未踏地にわけいり、未知のものを見つける探検家につながつていた。ガストン・レビュファ^{*3}やヒラリー^{*4}の本より、スヴェン・ヘディン^{*5}やV・フックス^{*6}、ハイエルダール^{*7}の本のほうが、むしろ、ぼくにはお気にめしていた。多くの大学受験生にとって悩みのたねの、「志望校」「志望学部・学科」の決定も、ぼくにとっては、しごくかんたんなことだつた。探検大学といわれていた京大へいき、探検(当時のぼくの頭には、南極がおもにあつたようだが)をやるために、理学部にはいるこ

^{*1} フランスの先鋭的登山家。アルプスの岩壁登攀の開拓者。

^{*2} エドマンド・ヒラリー。世界最高峰エベレスト(サガルマタ)峰の初登頂者。

^{*3} スウェーデンの探検家、地理学者。中央アジアやチベット高原の探検を精力的に行い、さまざまよえる湖ロブ・ノールを発見。

^{*4} イギリスの極地探検家。南極横断に初めて成功。

^{*5} ノルウェーの探検家、人類学者。南太平洋のいかだで漂流して、民族移動を検証した『コンチキ号漂流記』やイースター島での巨石文化を調べた『アク・アク』などで有名。

^{*1} 当時京大理学部学生。その後、地域住民運動に従事。現在、日本労働党京都府委員長。自営業。由良隆に改姓。

^{*2} 当時京大農学部学生。その後、昆蟲生態学・熱帯生態学の研究に従事。京大生態学研究センター教授在職中、ボルネオ島での飛行機事故で死亡(1997年)。



素晴らしいOB・OGたち（番外編）

「とんぼ」に集まった60年代後半の面々たち

川尻哲夫

●あと数年で、探査会の設立以来50年を迎えるとする探査部では、おそらく過去に500名以上の部員たちが入部、退部を繰り返しながらも、探査部や探査会を離れたどこかで、互いに接点をもちつつ、交流を暖めているものと推定します。

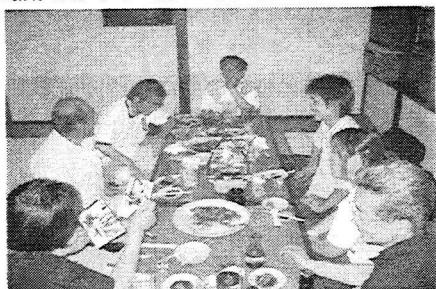
今年の6月26日、神奈川県JR伊勢原駅前の「お食事処とんぼ」に集まったメンバーもその私的グループの一つであり、実に結束力の強いユニークな面々でした。

●大阪の飲み屋で紙村さん（商・67年入学）と一杯やりながら、その会合の存在を初めて聞き、私の参加を了解してもらったのですが、どうせ行くなら現役にも参加の機会を設けてやろうと、連絡をとったところ2名（野澤君、今井さん）が参加を申し出てきました。

●とんぼとは、津端さん（商・65年）の経営する食堂の座敷。その時のメンバーは、井笠さん（商・65年）、成田さん（生・66年）、山口さん（商・67年）、萬地さん（商・68年）の計6人。他にも、小森さん、宝田さん、高橋さん、加納さん、今井さんなどのメンバーがおられるそうですが、その時は欠席されていました。

●そのメンバーと現役とは親子ほどに年齢が離れています。でも現役がツバルの遠征計画を話すと、先輩OBたちは青春時代に戻ったかのように、真剣に計画を聞き入り、逆にオジサンたちの懐かしき探査活動や台湾でのレストラン経営の話には、現役たちも「いつか自分も」との憧れを抱いた表情に変わっていく場面が展開されました。探査という共通の言葉を持つ異なる世代が、現代の探査を具体化しようとすると、純粋な探査は難しく、登山や旅行であったり、海外ビジネスであったりすることで精一杯が現実ですが、互いにどこか支援できる関係を持つことは、双方にとってもプラスになります。

●会合は、いつしか紙村さんのセブ島にいる新妻とお子さん（お孫さんではなく）の話題になり、雰囲気は最高に盛り上りました。500名の中には、このようなグループが今でもどこかで交流を続けているのでしょう。もし、その方々がHPを見るがあれば、近況報告や有益情報をHPにしていただきたいものです。会員・非会員を問わず、HPでの交流も多いに続けていきましょう！



www.tombo-isehara.info

←津端さんのお店のHP

お子さんの写真を見せて
大はしゃぎの紙村さん→



カナディアンロッキーを歩く —世界遺産バージェス頁岩を訪ねて—

1961入学 河合武臣

2000年8月にカナダを旅する機会があったので、報告をしたい。

旅は、現職の理科教師とOBの私そして自然好きの人たちで、ガイドを含めて計11人のツアーであった。

旅の主な目的は、古生代カンブリア紀のバージェス動物群の化石の発見現場の探訪とカナダの自然探訪であった。

はじめにバージェス動物群の化石探訪について述べてみたい。

動物群の化石が含まれている岩石は約5.3億年前の頁岩（けつがん）である。頁岩とは、泥岩が強い圧力を受けて、剥がれやすくなつたものである。

実際はどうかわからないが、岩石を本に見立てるときページをめくるように剥がれるのでこの名が付けられたらしい。現在は2000m以上の山の上に頁岩の地層が連なつてゐるが、昔は海の底であった。そして大陸の分布も今のものと異なつてゐることを留意してほしい。

頁岩の中の化石の最初の発見者は、1909年8月にスミソニアン研究所の米地質学者のワルコットによってであった。ワルコットは三葉虫の研究をしていたが、カナダの地質学者が1886年にカナダのロッキー山脈で大量の三葉虫を発見したという報告が彼の興味をひき、その23年後に調査隊の編成へと実現したのであった。調査隊に夫人と二人の息子をつれて、2300m付近のバージェス峠にさしかかった。馬に乗つて峠を越える途中で、夫人の乗つた馬が石につまずいたため、ワルコットは馬を下りて、ハンマーで石を碎いて道をかたづけていた。そのとき割つた一つの石の頁岩の表面に銀色に輝く奇妙な動物の化石が現れたことが、バージェス動物群発見の契機になつたのであった。

翌年の1910年から17年にかけて4回の大規模な発掘調査を行い、多数の化石を発見し、バージェス動物群と呼ばれ、学会で注目され、その後多くの研究者が現地を訪れるようになった。彼の発掘した路頭を記念して「ワルコットの崖」と命名され、現在では世界遺産に指定されている。

バージェス頁岩中の化石からは、きわめて保存の良い多数の奇妙な動物が発見された。その結果、中生代の恐竜時代の遙か前の古生代カンブリア紀に海の中では、多数の奇妙な動物群が生息していたということがわかり、地球の歴史に生物進化の重要な新しい1ページが書き込まれることになったのであった。

さて、我々はこの「ワルコットの崖」めざしての登山であるが、カナダのカルガリーの飛行場から車でロッキー山脈の麓の町バンフの町に行き、このバンフを拠点としてバージェス頁岩探訪を行つたのであった。

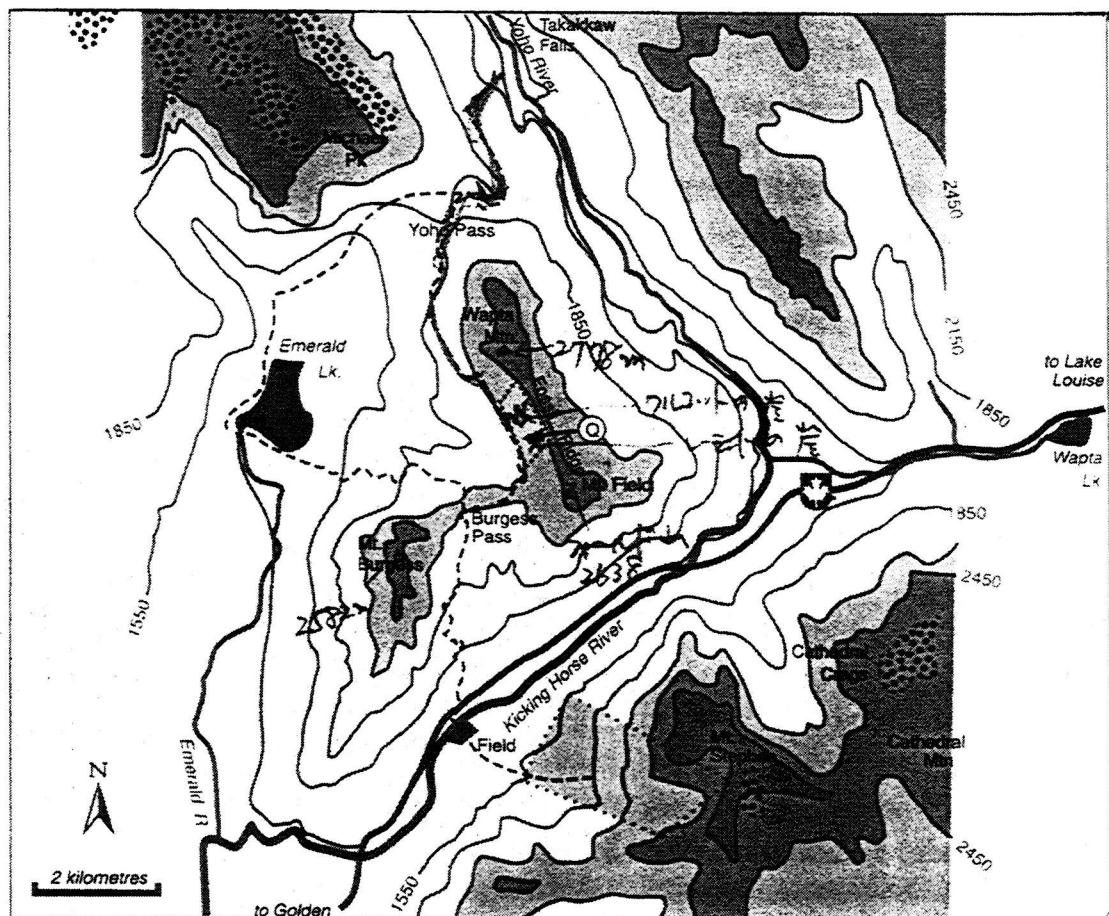
バンフからは、カナダ人の案内1人と現地日本人1人が新たに加わり、計13人のパーティとなつた。バージェス頁岩のある場所に行くには許可が必要で、化石のできる頁岩の現場保護のため、訪問者は年間に何人と決められているということであった。勝手に個人やグループでその場に行くことは許されないとのことである。必ずガイド付きで、山に入るには全員入山書類に各自署名をして出発である。署名は「何事が起こっても責任は持たない」ということへのOKサインということであった。そういうえば、転落事故や熊の出現、また天候の激変による事故などが考えられる。

さて、バンフの町から車でヨー・ホー国立公園に行き、その登山口から「ワルコットの崖」まで登り約5時間の道のりであった。

登山道は、びっしり樹木で詰まった暗い樹林帯、開けた明るい樹林帯、そして上に行くとほとんど樹木がなくなり草原の山と岩石の山となる。

途中、赤、黄色、紫、青、白などの高山植物が美しく咲き、またナキウサギなど氷河時代の生き残り動物も目の前に出現して私たちを楽しませてくれた。ロッキー山脈の中に入り込み美しい自然にふれ、感動のひとときを味わうことができ、5時間の登山の厳しさを忘れさせてくれた。

次に登山の様子や周りの風景そしてバージェス貢岩現場の写真などを掲載したい。
(写真の日付けは日本時間で、現地の時間ではありません。)

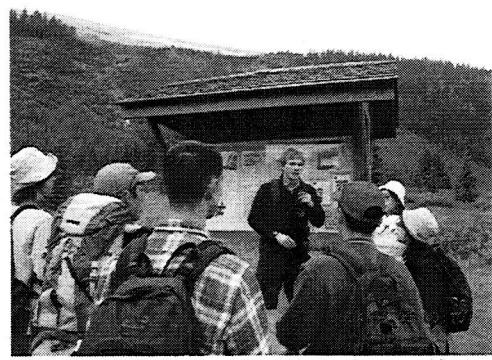


「ワルコットの崖」 図中央のワプタ山とフィールド山の中間西斜面にある。

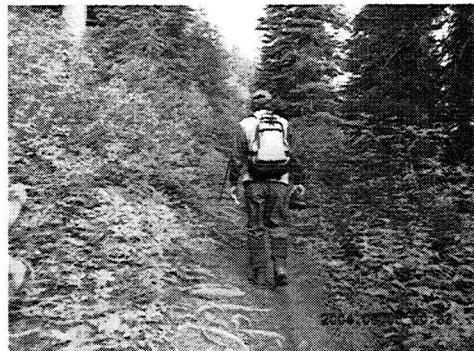
およそ2400m位の位置。向かい側にエメラルド湖とバージェス山が見える。



ヨーホー国立公園。登山口への途中のタカカウの滝



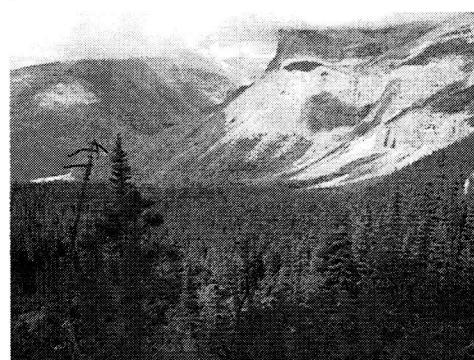
登山口到着。ここから約5時間の道のり。



登山道を行く。



赤いインディアン・ブラシの花



途中に見える景観。



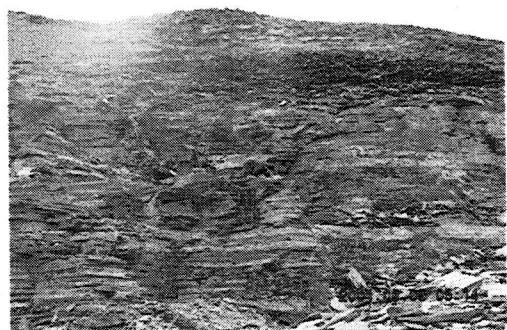
遠くに見えるエメラルド湖。
ワルコットの崖からも見える。



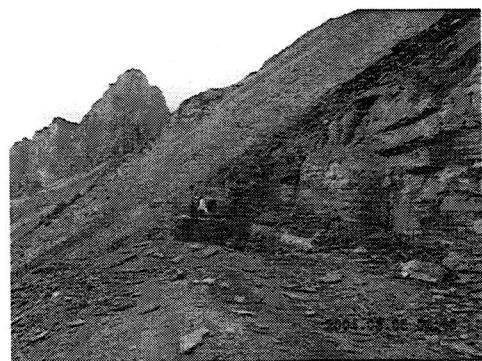
山頂には氷河が見える。この溶け水
が川や滝や湖をつくる。



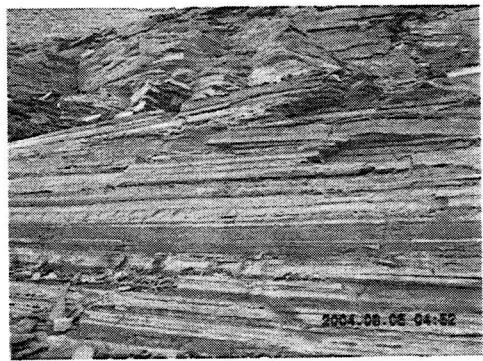
ガレ場にナキウサギが出現した。



ワルコットの崖



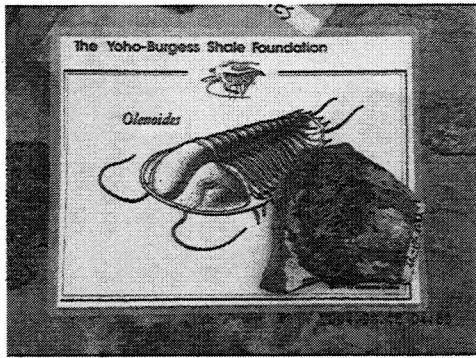
左ワプタ山。ワルコットの崖。人影の
後ろの黒いのは監視カメラ。
化石持出し禁止を見張っている。



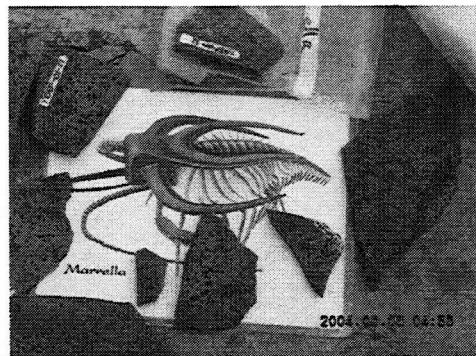
バージェス頁岩の地層。



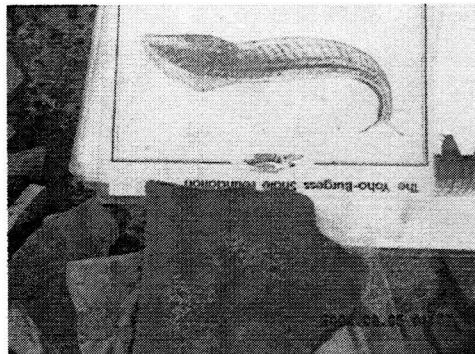
ガイドのリチャード氏。この赤い箱に化石が入っていて
見学者に見せてくれる。



三葉虫



ワルコットがはじめて見つけた銀色に輝く奇妙な化石。レース状のかに「マルレラスプレンデンス」と名づけた。



ピカイア。脊椎動物の祖先。



アノマロカリス。肉食どう猛なティラノサウルスに匹敵する2mにもなる肉食動物。この動物の正体がわかるまで多くの研究者の試行錯誤があった。
上の標本は小さなかわいいものであった。

カナディアンロッキーの自然

次にカナディアンロッキーの自然の特徴といいくつかの写真を紹介したい。
なお、カラー写真の方がよくわかるので、探検部のホームページの報告書を見ていただければ幸いである。

ごつごつした地層のはっきりした岩石でできた山脈。3000m級の山々の上には氷河がかぶさり、それが溶けて川をつくる。川は時に岩壁を落下して滝を作る。氷河の下にはたまに川がせき止められ湖ができる。氷河が削った石灰岩が微粒子になり湖に流れてくる。光が湖の中の微粒子にあたり錯乱して、美しい色を作る。また、氷河はゆっくり流れ落ち長い間にまわりを削り氷河地形を作っていく。松、ツガ、モミなどの針葉樹が広がり森を作り、二等辺三角形のような樹形が鋭く天をつくような景観だ。樹林帯では冬をのぞく季節ごとに高山植物の花が咲き、登山者の目を楽しませてくれる。小動物や、大型動物が森の生活者となり、登山者にときには危険な存在になることがある。

以下自然の写真をご覧ください。



これからはハワイ島？

1965年卒 宮崎捷二

左ハンドル車は初めてだ、おまけに右側走行。つい2カ月ほど前から自分の車をオートマ車に切り替えていたのでそれは大丈夫。しかし、恐る恐るだ。コナ空港（ケアホレ空港）から初めて乗り出す緊張に、気がつくと腕に肩に力が入っている。ハワイ島には高速道路はない。センターイン一本の対面通行だ。そんな道を100km/h前後で双方がとばすのだから余所見なんかしてられない。交差点は右折・左折車線が余裕をもって取つてあるので安心だ。後続車に気遣いながら速度を落とすと、広大な熔岩大地を縫つて遙か彼方へと続いている道の左手には、水平線でスカイブルーを分ける海原の紺碧。溶岩流が造り出した岩壁の黒褐色をめがけて砕け散る白い帶。右手にあったファラライ山は去り、正面に徐々にコハラ山脈が近づき、右手奥に雪を載せ幾つかの天文ドームをも載せたマウナケア山が雄大に構える。あれで標高4000mもあるの？という感じ。

北のはずれの小ぢやな町に

カーブの余り無い起伏の緩やかさと車の少なさにメーターがいつの間にか70マイル/hを指す。「馴れの油断は禁物だ。抑えて抑えて」と口に出して自分に言い聞かせる。T字路を左折だ。ワインカーだ、と思いつきやワイパーが突然フロントガラスで踊り出す、ありやー、チヨイと慌てる。更に海に沿い、左手前方にマウイ島の影、空港から50マイル(80km)程、1時間程で小ぢやなハヴィの町ハヴィ浄土ミッショナに着く。ここは浄土宗のお寺だ。更に4km程先のコハラ地区にある寺に1週間の滞在だ。普段は無人の寺で、自炊をしながらの気楽な逗留だ。近くにはマーケットもあるし豆腐や納豆だって手に入る。明治時代に移民として入植したりサトウキビ農場で働いたりした日本人の二世以降が多く住んでいるので、日本の食料には困らない。ここコハラはハワイ諸島を統一したカメハメハ大王の出身の地で像も建っているが、やはり小ぢやな町だ。

今回コナ空港に降り立ったのは04年2月24日(火)9時だった。翌25日はのんびりとした朝を過ごし、午後には、コナ空港の南10km余のカイルアコナの街へ。大きな街には日本ほどではないが車が多い。福岡出身の3世国武さん経営のコーヒー製品の店に入ると、ぎこちないが日本語で応対してくれホットする。チヨイと糸がって屋号は「カントリーサムライ」。『ラストサムライ』観ましたか」「家族全員で観に行きました」と言う。街の中心から外れたところのマーケットはドでかい。売りに出来ている食料品のパックなどもビッグなり。あれではデブも多くなるはず。

キラウエアへと足をのばす

26日(木)は10時半頃行動開始。先ずは、寺から南およそ32kmのワイメア町のワイメア病院の産科棟をチヨイと事情ありで偵察。その足でそのまま島の北東側の海に



沿って走りに走り、古くからの街ヒロを抜け今度は南下してキラウエア火山へ向かう。10\$でヴォルケーノ入り口のゲートを潜って行くと超広大なキラウエアカルデラにでっかく開いたハレマウマウ火口。もちろんアフリカのンゴロンゴロクレーターよりはずっと小さいが。水蒸気・硫黄の臭い、カルデラに動くのは蟻のような人。クレーターから南東方、海をめがけて下るのはチェーン・オブ・クレーターズ・ロード。広さを満喫して走り続けると突如舗装道路は真新しい真っ黒な熔岩に埋め尽くされてしまっている。車を捨て盛り上がった熔岩上を歩くが果てが見えない。長居は無用とて返す。これからまた 200.k m以上を戻らねばならぬ。ヒロの街を過ぎると真っ暗な道が待っていた。対向車が飛び込んで来るみたいで緊張のしっぱなし。暗さの2時間が何と長く感じたことか。寺では21時を過ぎていた。

なぜハワイ島？

同じ金を使うなら、中央アジア・アフリカ・南米アンデスや豪大陸などを歩き回りたい。ハワイ島に出掛けに行くことになったのは、突然02年6月から長男がハワイ島に住み着いてしまったからだ。それも浄土宗の僧侶として。3つの寺を掛け持ちで。ハワイを中国語では「夏威夷」と書くので「渡夏」で良いのかな？そんな訳で第1回渡夏は、様子見を兼ねて息子が世話になっている会員さん達（ハワイは檀家制度ではない）への挨拶やオアフ島ホノルルの浄土ミッショニ本山への挨拶も予定したので旅行社パックを利用した。ハワイ島には公共交通機関がないので息子の車に便乗しての行動だった。今回のレンタカー借用は、3月27日が第1子の誕生予定日だったからだが、結局小生がハワイ島滞在中には陣痛も始まらず。方向指示を出そうと思ってワイパーを動かしてしまった日本で、ハワイ時間3月3日に女児が産まれたとの電話を受ける。我が家にとっては初孫と言うところ。第3回渡夏は04年8月下旬だった。天の川がくっきり流れそれこそ満天の星、南の蠍座の尾が高く見える。

「理沙」米国には「Lisa」で届け出。ほぼ6ヶ月、笑うようになっていた。まだマウナケア山には登っていない。何も夏休み期間に2倍を越える航空運賃を掛けて行くことはないのだが。断りきれず公立高校・大学受験予備校・医療専門学校の非常勤講師をやっているので仕方がない。多忙さが現役時代よりべったりと纏わり着いている。はやく身軽になって時間をかけてハワイ島の自然を探検探査してみたいものである。（伊勢崎市宗高町23-2）



チベットに係わって

高松 康夫 1967年卒

私がチベットに関心を抱いてから30数年が経つ。この間、1987年と1994年にトレッキングツアを行った。1度目は単独で、2度目は会員の河合氏と2人であった。この経緯については紀行文として会報「探検・探査」の3号および4号に掲載されている。

2度目から10年経過した。ずっとあたためていた計画を実行する機会がやっと訪れた。中央チベットから西チベットへのトレッキングツアである。目指すは、聖山カイラスの周遊である。チベット仏教とヒンズー教の聖山として知られ、両巡礼者が數十日、数年かけて訪れる聖地である。

西チベットは一般的ツアはほとんどなく、個人ツアも困難である。方法としては、カトマンズのトレッキングツアーカンパニーへ手配を依頼（同時にチベットの旅行会社へも）するしかないが、人数が少ないと費用がそれだけかかる。しかも日数が確定しない。外国人の寄せ集めツアに参加する方法もある。

私は、定年後1年間再任用で勤務したが、今年の3月で退職した。拘束された限定休暇に縛られることなくトレッキングツアが可能になった。

雇用保険失業給付の関係で、プレモンスーンは無理なのでポストモンスーンの10月～11月実行を目標に、6月になって情報収集をはじめたが、寄せ集めツアの単独参加であってもその時期は困難であることがわかった。つまり、冬季にかかり巡礼者もツア客も少なく、また、宿泊所や給油の問題があり、ツアの設定が保証されないので。

そこで、プレモンスーンの来年5月～6月へ目標を変更し、今年の10月は折角だから情報収集を兼ねてカトマンズ、ポカラ旅行をすることにした。幸い、カトマンズで旅行会社を経営しているネパール人と知り合いの山仲間の友人（無職）がいるので、2人で行くこととなった。19日から31日まで、ネパール最大の秋祭りダサインを見ることが出来そうだ。

来年の聖山カイラスのトレッキングツアは、もう1人（無職）誘って3人で実行予定である。3人のみのツアか寄せ集めツア参加かは未定である。私以外はチベットは初めてなので、ラサにも足を延ばし期間は約1ヶ月の予定。

チベットは、当初秘境地域としての関心から始まり、政治問題（チベット独立問題）、チベット仏教精神文化、日本の仏教比較へと展開して、私にとっては生涯係わっていくことになるテーマである。

バニラ栽培熱から日本人ツーリスト御来臨カルトへ
パプアニューギニア東セピック州ワシク丘陵T村 2004年夏から

紙村徹（1967年商学部入学）

●何だか去年あたりから、おかしかったのだ。なんだか村中が浮ついていた感じかな。妙にだれもが熱っぽいのだ。そしてだれもがお金の話ばかりするのだ。なんだかとんでもなく、持ちなれない多額のお金がすぐさま手に入るといったふうな、浮ついた熱病にかかったみたいというか。

●ところはパプアニューギニア、あのオーストラリアの北に位置し、南半球の熱帯圏にある世界第二の巨島ニューギニアの東半分、そのパプアニューギニアは東セピック州、セピック川上流域ワシク丘陵のT村。この村はセピック川上流域の中心的な基地であるアンブンティからカヌーで半日の距離。比較的町に近い村なのである。つまり良きにつけ悪しきにつけ、西欧文明などの外部からの影響を受けやすいところに位置しているのである。

●T村には、去年が6年ぶりの再訪であった。この6年のあいだに、T村には幾人かの日本人が、わたし以外に訪れていた。パプアニューギニアには膨大な数の村があるのだが、にもかかわらずどうしてT村に日本人来訪者が集中したのか。

そのわけは、ある仲介者の存在があったからなのだが、わたしもさんざんお世話になっている人物なので、ここでは言及しない。

ともかく、結果的に6年間に8人ばかりの日本人が、集中してこの村に介入したのである。

1500人ばかりの村に、8人の外国人の来訪など、どうってことないと思われるか



結婚衣装を着けたT村の娘

もしれないが、外国人（現地では白人とみなしている）が、村の一般的な民家にホームステイするなどという経験は、村落開闢以来始めてのことなのである。

まさに驚天動地の一大事件なのであった。

（実はこの住み込みの手法を、この村に導入したのは、なにを隠そう、わたしなのであったが）。さて加えて、2001年頃、ある興行コーディネーターが来訪し、村の長老10人をピックアップしてシンシン・グループ（舞踏団）を組織し日本へ連れて行き、日本各地で2ヶ月間にわたる舞踏ショーを行ったのである。



ツーリスト用の木像に着色するT村の老人

●われわれにとっては、こんなことどうってことない、よくある出来事にすぎないわけであるが、このことでそれなりに金銭的報酬を受けた村人にとっては、どうってことないどころか、たいへんなことなのであった。ことに問題となるのは、バブアニューギニア人にかなり共通してみられる強烈な嫉妬心（ジェラシー）の処理であろうか。

われわれであれば、なんらかお世話になった場合、その相手になんらかの御礼をするのは当然と考え、当然ながらそうするであろう。われわれであれば、お世話になったその相手だけに御礼をして、それで終わりで済まされるであろう。

しかしバブアニューギニア人なら、もちろんその当人が御礼を受け取るのは当然であるが、それだけでは済まされず、その御礼を受けているところを、傍で見ている周囲の人々は、「どうしてかれだけが金銭を受け取るチャンスに恵まれて、自分はそうしたチャンスに恵まれないのであろうか？」と必死に考え始めるのである。そして「自分がそうしたチャンスに恵まれないのは、きわめて不当である」と思い定めるのである。かれらは、この不当さに我慢ならないし、耐えられないのである。自分も金銭収入を得るために、外国人に対してなんらかの画策交渉を行うであろう。そしてそれが叶えられない場合は、いい目を見た彼に対して、たとえば死に至る必殺の邪術をかけるかもしれない。少なくともT村では、必ず邪術をかけることになるはずである。事実、この村でのほとんど



「今日は大漁」と喜ぶ少女。餘の仲間。

の死亡原因は邪術によると信じられている。いや、信じる、信じないの話でなく、それは邪術なのであるとされる。「奴は死んだ、邪術だ」というわけである。

●こうした社会状況であるから、この村に介入する外国人は、よくよく心して報酬としての金銭を支払わなくてはならないであろう。

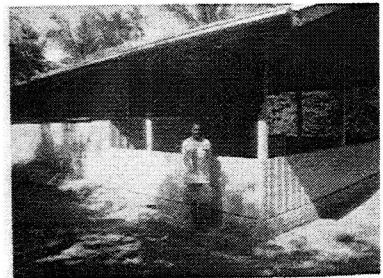
一部の人々だけに多額の金銭報酬が集中してしまうことは、かなりヤバいことなのである。

この村には銀行も郵貯もないために、一部の人の金銭報酬といつても、結局はまわりまわって

村中に循環してゆくのであるが、そんなことは T村の診療所と医療補助員。箱物は建ったが、薬も冷蔵庫もナースもいない。

村人の嫉妬心を緩和させはしない。要は誰もが、金銭の所有者になりたいではなく、金銭の配分者になりたいということなのである。金銭の配分者たるこそが、「男を擧げる」ことになるからである。「男を擧げる」ことなく死んでいくなんて、これほど無残な一生はないと考えているのである。

このようにして、この6年間に入れ替わり立ち代りして村に来訪した日本人によって村人一部に授与された金銭によって、村中の誰もが、自分も金銭を得たいという激烈な欲望が燎原の火のごとく拡がっていったのである。これはもはや一種の「拜金思想」の蔓延というべきであろう。



●2003年に再訪したおりには、村はバニラの栽培熱で沸き立っていた。バニラはマメ科の植物であるが、バニラの匂いと味は、日本でもおなじみであろう。熱帯の特産物で、ことにマダガスカル産が品質が優れているとされている。このバニラ栽培が、2002年10月ころから東セピック州北部一帯で急にブームになつたようである。州都ウエワクに近いマプリク町では、2003年10月までは、バニラ売価が高値で取引されたこともあって、激しいブームになつたらしく、浮浪の盗賊や売春婦が集結し、治安が悪化したようである。T村においても、村人全員がバニラ栽培に血眼になつていていた。もちろんT村のバニラ栽培は始まったばかりで、いまだ収穫してはいないので、現金収入の実体はないのだが、収入見込みだけで村人は浮き足立つていた。わたしのホームステイ先のホスト夫婦も、「お金が手に入つたら家族全員で日本旅行に行くので、そのときはおまえの家に泊まるから、よろしくね」と豪語していたものだ。

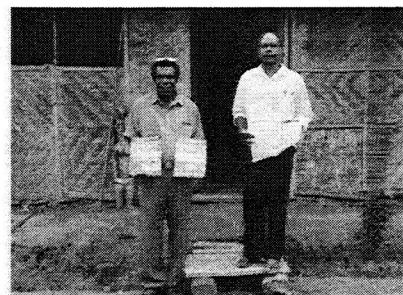
●こうした T 村のバニラ熱も、2003年12月以降のバニラ売価の暴落によって、いまだバニラ豆結実季を待たずに、「南海の泡沫」のごとくはじけてしまったのである。 いまだバニラ豆を売ってお金を稼ぐに至らないままに、期待していた「まとまった大金」の夢が消滅してしまったのであった。 村人全員の期待がバーッと膨らんだまま、少しも充たされないままに、まさに泡と消えたわけである。

どうもこうした「いささかも充足されなかつた大金への期待」こそが、2004年夏の「日本人ツーリスト御来臨カルト」へと繋がつていったらしい。

●この6年間に来訪した日本人のなかに、某学院教授で「アンスロポロジスト」と自称された M・O 氏がいた。 カレは「エコ・ツーリズム」と称して、5人のツーリストを引率して T 村にやってきたらしい。1週間の滞在の間に、ずいぶんとあちこちに大盤振る舞いをおこなったようである。 ついでに水道インフラ整備の約束までしたらしい(村人がそう言っている)。 村人たちの頭に、日本人ツーリスト御一行は、多額の金銭を無償供与してくれる、サンタクロースのような有難い人として、しっかりとインプットされたのである。

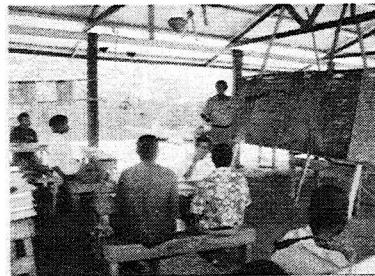
わたしが2004年夏にアンブンティの飛行場に降り立ったとき、T 村から数人の村人がわざわざアンブンティまで出てきて、わたしを出迎えてくれたのであるが、わたしの顔を見るなり、開口一番、「M・Oさん！」であった。私は愕然とした。だって去年も1ヶ月間 T 村に滞在していたにもかかわらず、わたしを M・O 氏と見間違えるなんて。 だいたい、どうしてわざわざアンブンティまで出迎えてくれるんだあ？ たしかにわたしと M・O 氏とは、頭髪が不足しているという共通項はあるのだが、見間違えるなんて、それはないのじゃないか。

●結局は、すぐさま、かれらは自分たちのミスを認めたが(ホームステイ先のホストは、3日ほどわたしを、M・O と呼んでいたが)、次にこんな噂が語られるようになった。 すなわち、「8月9日に、M・O が5人のツーリストを引率してやってくる」という情報であった。



T 村中学校の二人だけの教員。手にしているのは、教科書。M・O 氏一行の寄付金で教科書をそろえることができたと言っている。ただ、10冊しかない。もっと欲しいと言っている。

その情報はアンブンティからもたらされた。アンブンティで商店を経営していた T 村出身の青年が情報源であった。なにか携帯電話で M・O 氏から連絡があったという。それもルートは、州都ウエアク経由ではなく、首都ポートモレスビーからマウントハーゲン経由で直接アンブンティに飛来すること。話が



T 村中学校の授業風景。

具体的なので、そういうこともあるかなあと、わたしも思っていた。T 村では、ある長老は、自分の建てた精霊堂(男子集会所)の横に、日本人ツーリストたちの便宜を図るために、トイレットを新設していた。この長老とは、わたしはほとんど付き合いがなかったのであるが、なぜか、わたしが村に到着した日、わたしの宿舎にやってきて、じっと座って、わたしから声がかかるのを、ひたすら待っていた。夕食が済んでもまだ座っているので、「どうしたの? なにか用かい?」と尋ねると、かれは「M・O」と感極まって抱きついてくる。つまりこの長老は、わたしを M・O 氏と間違えて、プレゼントを贈ってくれるのを待っていたというわけなのだ。

別の長老は、わたしの荷物が少ないことを訝しがり、「水道施設の器材はどこにあるんだい?」と、ブーブーと不満をもらした。わたしが、「ぼくは M・O じゃないよ」と言っても、まったく聞き入れてくれないのである。「おまえは日本人だ。おまえは水道を敷設する義務がある」と主張する始末。わたしが約束したわけでもないのに、なんでわたしが責任をとらなきゃあならないんだ?

いまだオーブンできていない村の診療所のドクターボーイ(医療補助員)は、薬剤と冷蔵庫を要求してきた。さらにつれの未払いの給料を請求してきた。小学校の校長からは、教材費をはらってくれと言われた。

●まったく、わたしは JAICA のスタッフじゃあないちゅうに。どうも、こうした請求の根拠は、かつて M・O 氏らが学校や診療所に対して、お世話になった御礼として、いくばくかのお金を置いていったからであるらしいことが、あとから判った。つまり日本人の論理としては、村でお世話になったのだから、建前上は村の公共財である学校や診療所に寄付金をプレゼントして満足して帰国したのであろう。しかし T 村の人々に公共の福祉という観念は存在しない。校長やドクターボーイは、自分が日本人に何もしていないのに、日本人は一方的にお金をくれる。なんと有難い人たちであることよと、インプットされてしまったらしいのである。

日本人は一方的にお金をくれるのだ。

これは学校、診療所だけではすまなかった。青年団がサッカー・チームを作つていて、このチームの代表がわたしに面会を求めてきて、かなり多額の寄付金を請求してきたのである。しかも英文でタイプした書簡で。このチームには、M・O 氏は寄付金を出していなかつたらしいのだが、村では、学校・診療所に寄付金を出すのなら、自分たちサッカー・チームにも支払うべきこと、理の当然としているのである。やれ、やれ。だんだん腹が立ってきた。

●こういう事態が延々と続いたが、ついに8月9日という「約束の日」がやってきた。当初わたしも M・O 氏らが来るかもしれないと思っていたのだが、結果は「約束」は果たされなかつた。するとまたもやアンブンティ情報が村にもたらされ、M・O 氏から連絡があつて、飛行機が遅れたために、アンブンティ到着は8月12日になるという。M・O 氏は電話で、「ほんとうにすまない。12日にはきっとゆく」と謝っていたのである。あの M・O 氏が、そんなにこまめに連絡をしてくるものなのか、だいたい物理的にそんなことが可能なのか？かなり疑問である。

ついに8月12日になつたが、やはり「約束」は果たされなかつた。そして今度は9月9日へと変更されたのである。やはりアンブンティ情報である。当初8月9日といつていたが、今度は9月9日という。なんで9日なんだろう？毎月9日が、「約束の日」であるべきとでも考えているのであろうか？

●結局、わたしが村を撤収して帰国の途次にアンブンティに滞在中に確かめたところ、かのアンブンティ情報をもたらした青年は、M・O 氏からの電話なぞまったくなかつた、たんに自分がそう思い込んだだけなのだと自白したのである。ただしかれば、けつして村人をかついでやろうと、いたずらをしかけたわけではなく、本当にそう思ったということであるらしい。これは一種の「天からのお告げ」というか、「幻聴」というような現象らしいのである。近代的な商店経営をやっている青年ですら、こういう「天からのお告げ」を聞けるものらしい。そして、こんな不確かな情報を、まるごと信じて、T 村は全村挙げて沸き立つてゐるのである。

●おそらくは、期待ばかりが膨らんだだけで終わってしまったバニラ栽培熱のあとで、行き場を失った金銭獲得期待熱が次に見出したことこそが、M・O 氏らツーリスト御一行さまが再来して、村にいっぱいお金を授けてくれるという「信仰」であ

ったのではないか。そしてこうした「信仰」あるいは「カルト」は、かつて植民地時代にメラネシアのここかしこで流行した「カーゴ・カルト」(船荷崇拜)と酷似していると思われるのであるが、どうであろうか。

(了)



**パプアニューギニアの
地図と国旗**



紙村徹氏のプロフィール（神戸市看護大学のHPより抜粋）

専攻	文化人類学 社会人類学 オセアニア民族誌学
研究テーマ	パプアニューギニアの神話と世界像、所有観念と交換体系、身体像と民俗生理学
略歴	昭和47年横浜市立大学商学部経済学科卒業 昭和52年南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻修士課程修了 天理大学付属天理参考館民俗部学芸員として、アイヌ民族文化、オセアニア、アフリカ、台湾、北アジアの地域伝統文化の調査・保存・公開に従事し、 昭和60年より国立民族学博物館共同研究員として、パプアニューギニアの共同研究に参加 平成9年神戸市看護大学助教授
著書	天理参考館蔵品図録『ひとものこころシリーズ：パプアニューギニア』(平成元年、天理大学) 天理参考館蔵品図録『ひとものこころシリーズ：台湾原住民の服飾』(平成5年、天理大学) 天理参考館蔵品図録『ひとものこころシリーズ：台湾原住民の生活用具』(平成5年、天理大学) (以上責任編集および分担執筆) 『オセアニア②伝統に生きる』(平成5年、東京大学出版) 『世界のことわざ大事典』(平成7年、大修館) 『文化人類学 変貌する社会』(平成9年、ミネルヴァ書房) 『宗教と考古学』(平成9年、勉誠社) (以上分担執筆)
論文	「慣習法共同体としてのニューギニア高地社会の諸相」(昭和56年、『南方文化』8輯) 「ニューギニアにおける〈土地の父〉観念複合と呪術的宗教的土地所有権」(昭和57年、『南方文化』9輯) 「パプアニューギニア高地サカ・エンガ族の系譜伝承の解説」(昭和62年、『民族学研究』52-1) 「対称性から相補性へ：パプアニューギニア、サカ・エンガ族におけるクラン間相互の対立競合の変容」(昭和63年、『天理大学学報』157輯) “The Immigrant Hero Legend and Cosmology among the Saka Enga, Papua New Guinea Highlands” IN:Man and Culture in Oceania vol.4,1988
所属学会	日本民族学会、日本オセアニア学会、東南アジア史学会、日本島嶼学会、比較文明学会
担当科目	学部 文化人類学 医療人類学 看護研究演習 大学院 フィールドワーク論
ひとこと	文化人類学とは異文化理解を媒介にして自らを相対化するプロセスにこそ位置づけられます。頭を柔らかにすることです。せいぜい楽しみましょう。

日本全国、転々

津洲茂（1970年商学部入学） ヤマハ（株）仙台事業所勤務

昨年11月の探検会総会で、30年ぶりに卒業以来、初めて母校の地を踏んだ。得も知れぬ感慨を得た。たまたま転勤で横須賀に単身赴任していたから出席出来たのだ。同期の川尻君からお誘いを頂き参加した。丁度ツバル遠征の計画の説明があった。それから一年、彼らはもう遠征を終えて帰って来たのだ…。

私は卒業以来、仕事で札幌→旭川→札幌→福岡→大分→仙台→横須賀→仙台と日本全国を転々とした。横須賀以外は家族を帯同させた。子供達にとってはいい迷惑だったと思う。3人の子供達は小学校をそれぞれ3校ずつ変わった。いじめっ子からの逃れ方を学ぶという意味では成長したと思うのだが。長女には本当に申しわけなく思っている。学校の一番大事な時期に転校を余儀なくされた。小学6年5月の始め転校3日後に修学旅行。中学3年になる時の転校。前の中学は2年の秋に修学旅行が終了しておりおかげで2度体験した。青春多感な時期のはずだから迷惑を掛けた。寂しい辛い思いをさせた。



さて、私の探検部の思い出、2年の夏休み、「歩いてみ隊」というネーミングで北海道の大自然をあてもなく歩くことに挑戦。道東地区なのでほとんど原野・開拓入植地・過疎地・人よりも牛の数の方が多い地。「歩いてみ隊」というネーミングも、当時にしてみれば目新しかったのではと自負している。

宿泊は工事の飯場、バス停、駅の待合室、駅前広場（通路といった方が正解かも）・町で知り合った人のアパート・いわゆる道端での野宿、今だったら到底疑われそうなことである。



ある時、尾岱沼(おだいとう)というトドフラで有名な小さな田舎町から知床半島の付け根の根室標津という町まで歩いて北上している途中、夕暮れ近く、工事の飯場に水をもらいに立ち寄ったら、泊まてもいいよということになった。雑魚寝ではあるが。その日の晩、飯場の人が車で20分ぐらい離れた(北海道の20分だからかなり距離はある)尾岱沼のスナックに連れて行ってくれた。ママさんが横浜に知り合いがいるということで、ひとしきり話が盛り上がった。

人里離れた地で人に飢えていることもあったの
だろうけど、そこには現在の日本には有り得ない人情が
あった。思いやりが有った。心の暖かさがあった。

他にも車で脇を通る人が乗せて上げると声を掛けてくれる。せっかくだが断る。いい人が多い。こんな経験をしたからかどうかはわからないが、希望せずとも最初の赴任地は札幌であった。

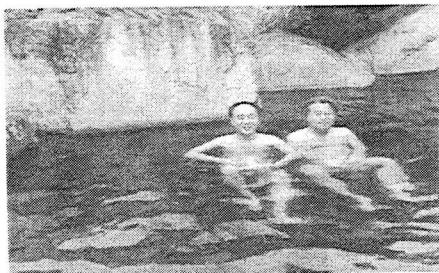


それ以来、スキンノを皮切りに30年、探検部魂を心に抱きつつ夜の街の探検に勤しんでいる。

樺淵茂さんとその転勤生活を支えた奥様（93年・大分の社宅にて）



湯布院温泉にて20年ぶりの混浴？（93年）



《2004年10月10日午前11時（現地時間）ごろ、ネパールのアンナプルナ・峰（8091m）の登頂を目指していた愛知県山岳連盟の登山隊が雪崩に巻き込まれ、佐藤理雄（43）＝名古屋市天白区＝と名塚秀二（49）＝前橋市＝の両氏が死亡した》

悲しい偶然だった。自宅のパソコンで、名塚氏の応援歌のような原稿を打ち込んでいた真っ最中に、事故の一報が飛び込んできた。

現場は6200メートル付近。直後に別の隊員が2人を掘り出したというから、おそらく雪崩の規模はさほど大きくなく、「一瞬の不覚」だったのだろう。

名塚氏は、世界に14座ある8000m峰のうち、これまでに9座計10回の登頂に成功（表1）。アンナプルナに登れば、1989年に遭難死した故山田昇氏（当時39）の9座を抜き、日本人最多記録となるはずだった。

日本は、残り少ない山岳界の人材をまたも失った。日本ヒマラヤ協会がまとめている「トータル獲得標高」のベスト30のうち、50歳未満の登山家は20人。そのうち、名塚氏を含めた4人は遭難死している。凍傷で両手の10指を切った山野井妙子氏、不調続きで5年も登れていない小西浩文氏らをどんどん差し引いていくと、世間の注目を集めるような活躍を期待できる有望株は極めて少なくなってしまう。

もちろん、登山は個人の課題と向き合っている時代だし、「世間の注目を集める」ことは、アルピニズムや冒険、探検にとって本質的には重要でない。だが、死んで初めて大きく報じられた実力者・名塚氏の生き様を思うと、余計な口出しもしてみたくなる。

04年7月28日夕、東京・池袋に山岳関係者約150人が集った。アンナプルナ・峰に向かう名塚氏の壮行会だった。挨拶に立った日本山岳協会専務理事の八木原圓明氏（57）は、力を込めてこう語った。

「世間では、セブンサミット（表2）だ、エベレストの最高齢登頂だと騒いでいるが、そんなのは放っておけばいい。日本人初の14座全山登頂。これをぜひ、名塚君に成し遂げてもらいましょう」

八木原氏は、「日本最強の山岳団体」とも言われる群馬県山岳連盟の育ての親。山田、名塚両氏も群馬岳連の一員で、名塚氏は、山田氏の背中を見て力をつけてきた。

壮行会で、セブンサミットやエベレスト最高齢登頂の話題が出た背景には、近年のアルピニズムにおける「評価」の問題がある。

後者のエベレスト最高齢登頂とは、言うまでもなくプロスキーヤーの三浦雄一郎氏のことである。70歳だった03年に登頂した。数億円の事業費で、大勢の高所ポーターとガイドが「ご老体を頂きへいざなった」（現地登山ガイド）。シェルバたちの間では、「最高齢記録よりも使った酸素ボンベの数が記録的だった」とお笑い種になっている。これは、純粹な冒険というより「人体の不思議」に類する事例ではないか。

が、もっと曲者なのは、前者のセブンサミットである。

04年6月18日、多くの新聞に、渡辺大剛氏（23）の名が躍った。渡辺氏が北米マッキンリーに登り、日本最年少記録で、セブンサミット（7大陸最高峰）完登を成し遂げたというニュースだ。

セブンサミットの世界最年少記録争いは、ここ数年、日本勢が独占してきた。99年に野口健（亞細亞大）、01年に石川直樹（早大）、02年に山田淳（東大）の各氏が、相次いで記録を更新してきた。3氏の活躍は、日本でのセブンサミットの「魔法の力」を大いに実証した。

なぜ「魔法」なのか――。

そもそもセブンサミットを初めて達成したのは、ディック・バス氏という米国の石油王。50歳を過ぎてか

ら思い立ち、登山経験がなかったため、大勢のポーターとガイドを従えて登り、85年に達成した。現在、北米で（自然保護グループともめながら）自分のスキー場を拡張中で、その宣伝文句に「7大陸最高峰登頂第1号」が使われているという。

当時から、アルピニズムの世界では、あまり積極的に評価されなかつた。なぜなら、8000mを超すエベレストを登るのは確かに大変だが、残る6峰は、さほど難しい登山でもないからだ（もちろん、植村直巳や山田昇がマッキンリーで遭難したように、悔ることはできないが、だからこそ彼らは「まさかの遭難」と言われた。しかも、植村は単独、山田は厳冬期という条件でもあった）。バス氏の・偉業・はむしろ、優秀なガイドを雇い、高所ポーターを使うことで、「だれもが世界最高峰の頂点に立てる」ことを実証したことだった。

実際、バス氏の登山をきっかけに、エベレストの商業公募登山が隆盛を極めていく。ルート、天候、食料、出発時間から休憩の取り方まで、何でもガイドが教えてくれる。荷物は高所ポーターが運んでくれる。ヒマラヤ大衆登山の幕開けである。

そこに目をつけ、「世界最年少」というエポックを持ち込んだのが、野口氏だった。

「ぐれて上級生を殴るなど荒れた学校生活を送っていた少年が山で更生した」

そんな感動物語と相まって、一躍スターダムにのしかつた。著書『落ちこぼれてエベレスト』は絶賛され、CM出演や講演活動などに引っ張りだこになる。広告業界のプレーンたちに囲まれ、彼は事実上、タレントになつた。今や国政選挙に討つて出るという観測もあるほどの著名人である。だがその後、高峰には登っていない。せいぜいエベレストのベースキャンプ付近でゴミ拾いをして「清掃登山」と称している程度だ。それでも、現在の肩書は「アルピニスト」や「冒険家」である。

野口氏の成功はしかし、ブームとしては目立ちすぎた。とくに清掃登山を通じ、「過去の登山家がヒマラヤの環境を台無しにしてきた」という指摘は、山岳界ではスタンドプレーにしか映らなかつた。日本山岳会や日本ヒマラヤ協会、日本労働者山岳連盟などが環境問題に取り組み始めた直後に、野口氏が言い出したからだ。彼のアルピニストとしての「資質」を問う声も出始めた。

そうした事情を耳にしていた石川氏は、もっと「したたか」に行動せざるをえなかつた。彼は、セブンサミットがアルピニズムとしても、冒険の一つとしても、価値の低いことを熟知していた。だから、自分が登山家やアルピニスト、冒険家として表記されるのを強く拒んだ。私が取材した際にも、

「僕の肩書は、学生あるいは旅人にでもしておいてください」

と、笑つた。

彼は作家石川淳の孫である影響か、早大在学中からプロはだしの文章が書けた。紀行文を主体とする物書きになるのが夢だった。そのひとつの素材として、南洋のスターナビゲーション（星の位置から、進路を特定する伝統的な航海術）の研究をライフワークとしていた。

「ミクロネシアに行くには、お金がいるんです。セブンサミットに成功すれば、出版社からの援助がある。すでに2社から声がかかっています」

そんな石川氏がコジウスコを登り、最後に残したエベレストに向かう直前、彼をよく知る地平線会議代表の江本嘉伸氏はこう言って叱咤した。

「何たることか。高尾山と同レベルのコジウスコに、どんな思いで登ったのか。自分の経歴を汚したようなものだろう」

石川氏はそれでもエベレストに行き、著名ガイド、ラッセル・プライスの公募隊で登頂した。が、同時期に、14歳のシェルパが史上最年少でエベレストに登頂し、セブンサミット最年少記録の価値はますます下がってしまった。

次に登場してきた山田淳氏は、周囲が呆れてしまうほど、純粹にセブンサミット達成をめざした。山岳雑誌「岳人」で、石川氏と対談した際、石川氏が「セブンサミットを過大評価すると、その先の人生で困る」と忠

告しても、山田氏は、セブンサミットがいかに偉業であるかを強調するばかりだった。

さあ、そして04年の山岳ニュースを飾り続けた渡辺氏である。

渡辺氏は、九州産業大学4年生のときに「山田氏の『23歳9日』の記録を抜く」と宣言。記者会見をし、大々的に寄付金を募った。野口、石川、山田氏と明確に違ったのは、記者会見の時点で、ビンソンマシフ、エベレスト、マッキンリーの3峰を残していた点だ。3つも残している日本人は、把握しきれないほど大勢いる。ちっともアドバンテージではないのだ。しかし、彼はこう強調してはばからなかつた。

「みんなの夢を、期待を、僕が実現したい。ぜひ寄付に協力してほしい」

渡辺氏は大学のバックアップ、地元企業の協賛、個人の寄付金（一口1000円で全国公募した）を受け、04年1月にビンソンを登った。新聞は「あと2峰！」と書き立てた。そして同5月24日、エベレストに登頂した。大学側は大々的に発表した。「最年少記録に王手！！」と書いた新聞もあった。

しかし、実は「王手」どころではなかったのである。同じ日、同じ公募登山隊と一緒に登っていた同い年の米国人男性がエベレストに登頂し、セブンサミットの世界最年少記録を達成していた。この男性より誕生日が早い渡辺氏はどうあがいても勝てない状況になっていたのだ。彼は6月にマッキンリーを登り、「日本最年少記録」となった。ここにきてようやくマスコミもクール・ダウンした。

冒険家で中央大助教授の九里徳泰氏はこう指摘している。

「セブンサミットの最年少記録が生まれる裏側を冒険家として世界中の現場で見てきて、少々疑問を感じている。7大陸最高峰登頂という行為のどこが冒険的であるのか、ということだ。世界初を謳うならば人類が体験したことのない、未知なるものへの挑戦であるべきではないか。お金と時間とやる気があれば7大陸最高峰はだれでも挑戦できる。もはやそこに死の臨場感や孤独でつぶされそうになる精神状態はない」

セブンサミットは言ってみれば、深田久弥の『日本百名山』の地球版である。アルピニズムや冒険とは、対極にあるとさえ言える。それでも、セブンサミッターは、日本人の多くの心をつかんで放さない。だから「魔法」なのだ。

セブンサミッターたちは、いずれも自身のホームページ（HP）を作成し、登山の模様をリアルタイムで伝えた。こんな感じだ——。

《一緒に登るシェルパのドルジェがしごれをきらして、僕にダウンジャケットの上からハーネスをつけてくる。そして酸素をセットしていると横から全部サポートが入る。できばき行動しないと危険なのだ。僕みたいにゆっくりしていたら後で大変な事になるのだろう》（渡辺氏のHP）。

こうした紀行文が大きな反響を呼んだ。HPの掲示板には、老若男女が「がんばって」と次々と書き込む。渡辺氏の言った「みんなの期待」は、確かに存在するのだ。野口、石川両氏は記録を抜かれた後も、各種雑誌やテレビ番組でお馴染みの顔となり、著書も次々に刊行されている。

そうした中、もっとも割を食っているのが、より厳しいルートと対峙している登山家たちである。無論、本人は注目されたいなどと鼻から思っていないだろう。「日本最強の登山家」と言われながら、凍傷で指5本を失った山野井泰史氏（39）に取材をしたとき、

「いま日本で一番有名な登山家ってだれかな？ 田部井順子と野口健のどっちかだろうなあ」

と、無邪気に笑っていた。その山野井氏と対談した元力士の舞の海は、

「プロスポーツと違い、山登りの世界は孤独だ。世俗を超えた姿勢、その崇高さにめまいすら覚えた」

と、感嘆しきりだったという。

「それでも」と、敢えて言いたい。

経験、技量、運が伴わねば達成できない困難なルートを次々に攻略しながら、死ぬまで日の目を見なかつた名塚氏と、熱狂的なファンを抱えるセブンサミッターたちを比べると、どうにも口惜しい気がしてならない。名塚氏の功績の一例を挙げよう。

(85年冬) 映画「植村直巳」撮影隊に参加し、西田敏行をサポート。登頂シーンの撮影のため、実際に登頂。

(90年夏) K2の北西壁に新ルートを拓いて登頂

(91年春) カンチエンジュンカの最難関ルート・北東支稜を征服

(93年冬) エベレスト南西壁の厳冬期初登頂

自省を込めて言えば、せめて探検部や山岳部に名を置く人たちには、本物を見極める眼力を養ってほしい。
それなしには、自分たちが何をすべきか見てこないはずではないか。

「冒険しない若者は死んだ方がまし」

栄えある日本人最年少記録に輝いた渡辺氏の好きな言葉である。彼に会う機会があったら、ぜひ尋ねてみたい。「冒険って何だ」と。

止

(表1) 8000m峰14座=●は、名塚氏が登頂した山

- エベレスト (8848m/ネパール、中国)
- K2 (8611m/パキスタン、中国)
- カンチエンジュンカ (8586m/ネパール、インド)
- ローツェ (8516m/ネパール、中国)
- マカルー (8463m/ネパール、中国)
- チヨー・オユー (8201m/ネパール、中国)
- ダウラギリ・ (8167m/ネパール)
- マナスル (8163m/ネパール)
- ナンガバルバット (8126m/パキスタン)
- アンナプルナ・ (8091m/ネパール)
- ガッシャブルム・ (8068m/パキスタン、中国)
- ブロード・ピーク (8051m/パキスタン、中国)
- ガッシャブルム・ (8035m/パキスタン、中国)
- シシャパンマ (8012m/中国)

(表2) セブンサミット (7大陸最高峰)

〈ヨーロッパ大陸〉 エルブルース (5633m/ロシア)

〈アフリカ大陸〉 キリマンジャロ (5895m/タンザニア)

〈アジア大陸〉 エベレスト (8848m/ネパール、中国)

〈北米大陸〉 マッキンリー (6194m/アラスカ)

〈南米大陸〉 アコンカグア (6960m/アルゼンチン)

〈南極大陸〉 ピンソンマシフ (4897m/南極)

〈オセアニア大陸〉 コジウスコ (2230m/オーストラリア)

〈同〉 カルステンツピラミッド (4880m/パプアニューギニア)

(※) オセアニアの最高峰をコシウスコとする説と、カルステンツとする説がある。

2003年度 探検探査の会 会計収支報告

(2003年4月1日～2004年3月31日)

a) 収 入 (単位:円)

◆ 会 費 収 入	-----	174,000
◆ 利 息	-----	6
◆ 過 年 度 修 正 分	※	△ 6
取 入 計		174,000

b) 支 出

総会案内及び会報送付

◆ 郵 送 代	-----	17,100
◆ 文 具 代	-----	1,247
◆ 会 議 費	コピーデザイン	2,040
◆ 会 報 製 本 費	-----	30,135
◆ ホームページ初期設定費	-----	10,500
◆ ホームページ年間使用料	-----	10,500
◆ そ の 他	-----	0
支 出 計		71,522

c) 単 年 度 収 支 ----- 102,478

(= a - b)

d) 前 年 度 繰 越 金 ----- 387,046

e) 収 支 計 ----- 489,524

(翌年度へ繰り越し)

・収入については、昨年度に引き続き、滞納者からの会費納入があったため、ある程度まとまった額となった。
 ・支出については、会報10号を発行したため、2002年度と比べ会報印刷費とその郵送代がかかっている。また、同時にホームページも開いていたため、そのための経費もかかった。
 ・昨年度、それまで契約していたプロバイダーが倒産したことに伴い、別のプロバイダーと新規に契約を行った。このため、初期設定費(初期設定料金及びドメイン取得料金)がかかっている。なお、2年目以降は、経常的にかかるのは年間使用料のみとなる。

※収入欄の過年度修正分は、15年度に計上すべき利子(6円)を昨年度のその他収入(3726円)に含めてしまったため、二重計上にならないよう、今年度収入から差し引く

(会計担当 佐々木 仁)

【編集後記】

1992年11月の創刊号から2004年11月までの11号まで会報誌を発刊してきた。創刊号から3号までは、高松氏の協力で市大で幹事と探検部学生の協力を得て印刷、紙折り、冊子づくり、ホチキス止めなど、流れ作業の重労働をした思い出がある。4号からは会費も貯まつたので、編集のみあとは業者に依頼することになった。

編集は創刊から8号まで河合、9号田村、10号川尻、11号川尻、河合が担当した。今後、定期的に会報誌の発行はなされないが、いままで情報の伝達と親睦と交流などに役だつたことと思う。少し寂しいが、探探会の新しい歩みに役目を終えたと前向きに考え、今まで会の活動や原稿寄稿など会報誌発行を支えて頂いたみなさんに感謝を述べ終わりの言葉にしたい。

(河合)

今夏のツバル隊の会計担当者から概略として聞いた話ですが、OB・OGの皆さんから寄付金を予想以上に多くの方々からいただいたそうです。特に入金が集中した時期は、探探会からのカンパお願い文と現役の計画書を探探会会員全員に送って以後だそうです。

やはり紙の文書の伝達力(効果)は、あったのだと得心しました。HPだけのPRでは、ほとんど集まらなかつたものと推測します。

この会報も含めて合計11冊を会員のご自宅へ届けたことになります。しばらく会報は休刊し、代わってHPが会員相互の情報伝達の役割を担います。まだまだ不十分なHPですが、皆さんの書き込みがあってこそ、効果的なHPに育っていきます。投稿を大いにお願いします。

そして、再び紙の会報が届けられる時は、きっと大きなプロジェクトが始動しているときであることを夢見て、最後の編集を終えることとします。

(川尻)

横浜市立大学 探検・探査の会

会報 11号

2004年10月27日編集

2004年11月 6日発行

編集 河合武臣 (1961年入学)

川尻哲夫 (1970年入学)

印刷 フジプランズ

東京都日野市が丘3-1

T E L : 042-584-3580

F A X : 042-582-7108

まだまだあるぞ、藏出し写真

パプアニューギニア写真集（紙村徹氏撮影）



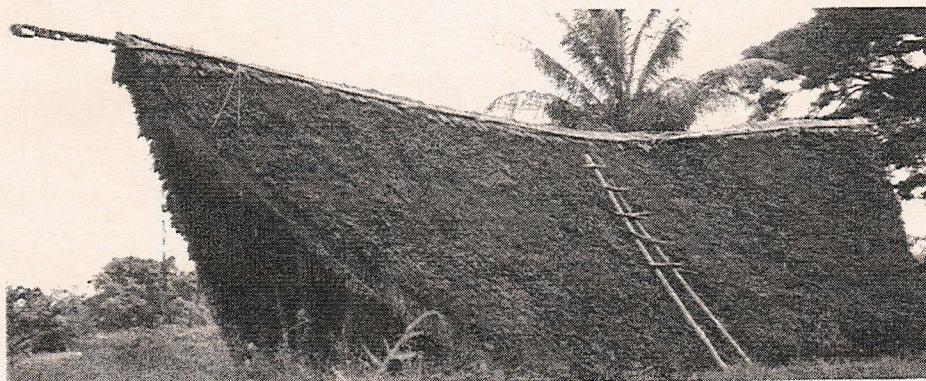
午後の一刻を涼んでいるT村の一家



装飾土器を成型中の男。



T村西隣の沼に魚獲りに出てきた女



ツーリスト来臨を待つT村Y地区の精霊堂。
M. O氏のおかげで内部の写真撮影代がひどく値上がりした。